ISSN 2189-2652

英文学会誌

English Department Journal vol.52

第52号

宮城学院女子大学学芸学部英文学会
Miyagi Gakuin Women's University
2024年 3月

表紙挿絵タイトル：“Now come and hear the letter.” A mother and four daughters.
作者：Alcott, Louisa M
出版年：1878
ⓒ British Library

英文学会誌

第 52 号

2024 年 3 月

目次

論文

ホーソーンの作家としての可能態
—*The Scarlet Letter* における歪な身体 ・・・・・・・・・ 3
山口晋平

教材研究ノート

18 世紀英国文化謎解きの旅
（イェール大学から宮城学院女子大学へ）
—肖像画《ヒル夫妻》をめぐって—・・・・・・・・・・ 21
吉村典子

＊　＊　＊

新任教員挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
Timothy John Phelan　山口晋平

英文学科生の活動

ESL（English Speaking Lounge）・・・・・・・・・・・・ 50
2 年　遠藤みゆ　4 年　中島かれん

長期留学報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
ウィニペグ大学　3 年　川村理子
ハワイ大学マノア校　4 年　伊藤凜
忠南大学　4 年　大沼ももか
ウィニペグ大学　4 年　嶋幸恵
ハワイ大学マノア校　4 年　三浦早貴

カナダ研修報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
3 年　猪狩花那　3 年　細川晃菜
4 年　芳賀友仁香

British Hills インターンシップ報告
3 年　森葉月

＊　＊　＊

2023 年度英文学科活動報告

教員研究・教育活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
英文学科講義題目・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
英語英米文学専攻講義題目・・・・・・・・・・・・・・・ 88
卒業論文題目・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
英文学会活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94

＊　＊　＊

English Certification —私の勉強法— ・・・・・・・・・・ 98

＊　＊　＊

編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 105

2023 年度　論文

ホーソーンの作家としての可能態
—*The Scarlet Letter* における歪な身体

山口晋平

はじめに

19 世紀における身体の歴史にはそれまで人々にとって未知であった部分を明らかにしようとする側面が少なからずあった。ピーター・ブルックスは 19 世紀における身体は殆ど調べつくされていたと語り、当時の診療所に関して “The clinic becomes a space for examining, comparing, and classifying diseases, and the opening of the body—the dissection of cadavers—becomes the focus of medical training.”（Brooks 221）と論じる。さらに彼は当時隆盛を極めた疑似科学の議論は身体を「読み解く」（“reading” the body）ことに威信をかけていたと続ける。外科手術において麻酔を用いて痛みを遠ざけ始めたのも 1840 年代のことであり、19 世紀という時代は人類が身体への理解を大いに深めた時代であることは間違いない。そして催眠術を始めとした疑似科学に関心が少なからずあったナサニエル・ホーソーンもまたこのような流れの中、身体に対する関心を高めていたことは明らかである。1843 年に発表した “The Birth Mark” では、美しく完璧な女性ジョージアーナに唯一の欠点であるかのように存在する頬の痣を取り除くために夫であるエイルマーは手術を行い、その結果彼女は亡くなってしまう。1844 年に発表された短編作品 “Rappaccini’s Daughter” は有毒の植物と親和性を持つベアトリーチェという女性が最終的に解毒薬を飲むことによって亡くなってしまう物語である。このように当時のホーソーンが立て続けに優れた科学者や医師が身体に手を加える作品を発表していることは、この頃のホーソーンが身体への関心を高め、造詣を深めていたことを示唆する。

本論ではこのように身体へのまなざしを強くしていた中で彼が 1850 年

に発表した *The Scarlet Letter* における身体表象について、特にチリングワースの身体を出発点として議論を始めようと思う。この作品では医師であるチリングワースが患者としてディムズデールの身体を診察したり、そのチリングワースの身体自体が歪みながらそれが意図的に強調されたりと、ホーソーンの作品の中でもとりわけ身体表象に力を入れていることが窺える。序文として挿入される "The Custom–House" の半自伝的な語りの章が終わって始まる *The Scarlet Letter* 本編の物語冒頭において、ヘスターの視界に映りこむチリングワースの姿は彼女と読者の目に強く印象付けられるのである。以下はその場面の引用である。

> He was small in stature, with a furrowed visage, which, as yet, could hardly be termed aged. There was a remarkable intelligence in his features, as of a person who had so cultivated his mental part that it could not fail to mould the physical to itself, and become manifest by unmistakable tokens. Although, by a seemingly careless arrangement of his heterogeneous garb, he had endeavoured to conceal or abate the peculiarity, it was sufficiently evident Hester Prynne, that one of this man's shoulders rose higher than the other. (*Scarlet* 60　下線は論者による)

ここで強調される彼の両肩の高さが異なる身体は健常な群衆の身体が密集している中で異様な姿として晒し台に立つヘスターの視界の中でも一際目立つ存在として描かれる。このシーンのチリングワースの身体は意図的に歪まされ、公衆の身体と対照的な異常性を帯びていることが分かる。この身体的な異常性をホーソーンが強調したかったことは彼の形態異常が作中 "deformed"、"misshapen"、"deformity" といった言葉で何度も言及されることからも明らかだろう。このようにこれほどホーソーンがチリングワースの歪んだ身体を強調したことには何かしらの意図を感じさせる。例えばメガ

ン・ヒーリーはチリングワースのこういった形態異常の身体に対して “this mention of his deformity shows that his physical nature is linked to his moral nature and that the deformity is seen as an outward symbol of his inner corruption.”（26）と述べる。彼の内部の堕落が彼の身体に表れているというのだ。従来の研究においてはこのようにチリングワースの身体が彼の心理と密接に繋がっていることが示唆され、彼の悪魔性・倫理観の破綻といった性質と結び付けられていると解釈するものが多い。しかしながら、ミリセント・ベルが *Hawthorne's View of the Artist* の中で “Perhaps an artist's “portrait of the artist” will be…a self–portrait, with lineaments of joy and anguish very like his own.”（vii）と語り、同時にチリングワースの他者を覗き込む視線が芸術家のそれと類似していることを指摘している（Bell 74）ように、チリングワースという人物に少なからず作家としてのホーソーンの姿が重ねられることを考慮すると、このチリングワースの歪んだ身体は作品の物語内の解釈に納まるものではなく、作品の外側に存在する作家ホーソーンの姿をも映し出している可能性を秘めているのだ。もしホーソーンが芸術家としての自分をチリングワースに投影し、そして自画像として描き出したのであれば、より一層この作品におけるチリングワースの身体を歪めたことを考慮する必要性が増す。

ミシェル・フーコーは *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*（1977）にて個人の身体と社会性やイデオロギーが切っても切り離せない関係であることを論証した。身体には社会規範やイデオロギー、さらには当人の環境そのものが刻み込まれ、表出する。1840 年代後半当時のホーソーンは金銭的にも大きく困窮を極めた結果、税関での仕事を余儀なくされており、作品執筆の気力も失っていた。しかし 1849 年夏にはセイラムの税関検査官の職も追われ、再び執筆活動に向かわざるを得なくなる。このような伝記的事実からも当時のホーソーンが経済的状況と芸術家としての作家業の間で作家としての葛藤を抱いていたことは容易に窺える。ホーソーンの中

で作家としての自分のアイデンティティはまさに歪んでいたに違いない。そしてだからこそホーソーンの自画像として機能するチリングワースの身体が両肩の高さが異なる形態異常を伴うことになったのである。

このように本論では *The Scarlet Letter* における身体表象をメタフィクショナルな視点から、つまりホーソーン自身の作家としての在り様と結び付けながら再解釈することを目的とする。

1.「税関」の語り手の身体

The Scarlet Letter 執筆当時のホーソーンの環境が彼の作家人生の中でも最も激動の時代であったことは言うまでもない。ランダル・スチュワートの伝記によるとこの作品を執筆当時の状況はホーソーンにとって "a time of "great diversity and severity of emotion"" であり、彼の母が病の悪化によって他界したことも相まって、"overwhelming was the accumulation of misfortunes that Hawthorne suffered (his wife reported to her mother) a "brain fever," or something dangerously close to it." (Stewart 89–91) という状況だったという。精神的にも身体的にも疲弊した時代であったことが分かる。この頃の執筆状況に関してホーソーンの内心が垣間見えるのがこの作品の序文として挿入された "The Custom–House" (以下「税関」とする) の章である。

この「税関」と呼ばれる序文はホーソーンが *The Scarlet Letter* を執筆するに至った過程を、フィクションを織り交ぜながら自伝的に語ったものである。ここではホーソーンの分身ともいえる「税関」の語り手が実際に執筆業から離れて税関で働くようになったこと、そしてそこで緋色の布に刺繍された金糸の A の文字に出会い創作活動を再開したことが語られる。そもそも序文として作家の創作活動を再開させる経緯を挿入したこと自体注目に値する。ホーソーンがこの作品を執筆する際に作家として「書く」という行為を如何に意識していたかが垣間見える。そして最も興味深いのがこのいわば作家再生の物語ともいえるプロットをホーソーンが語り手の

身体表象を通して描き出していることである。

語り手は税関時代の自身の創作活動に関して “thought are frozen and utterance benumbed, unless the speaker stand in some true relation with his audience”（4　下線は論者による）と語っている。ここの発話者（the speaker）と聞き手（his audience）は当然ながらホーソーンとその読者を示唆しており、彼が長いこと執筆作業に取り組んでいなかったことをこのように表現していることが分かる。この「麻痺した」（“benumbed”）という状態こそが当時のホーソーンの状態を表す言葉として最も適切だったことは興味深い事実である。マーク・オリヴィエは作家が執筆できなくなる「ペン麻痺」（pen paralysis）という状態に関して “Pen paralysis, a term that refers to both writer’s cramp and writer’s block, represented a threat to the chief measure of a man: his productivity”（Olivier 226–27 下線は論者による）と論じている。作家が書く行為を阻害されたとき、それはその人物の productivity への脅威となるというのである。ここでオリヴィエが使う “productivity” という言葉が作家としての創作能力とともに男性的な生殖能力を指していることは彼がこの引用の直前でペンとペニスのメタファーに言及していることからも明らかである。また後に詳しく論じるが 19 世紀の作家、とりわけ作家として執筆する作業を「覗き」という欲望の昇華として捉えていたホーソーンにとっても男性性と作家的行為というのは切っても切り離せない関係であったことは間違いない。ペン麻痺という状態が “a threat to the chief measure of a man: his productivity” に成り得たとオリヴィエが論じたように、いわば「税関」において語られる作品執筆から遠ざかった語り手の状態は作家的・男性的な生産性を失った状態であったと言い換えることができる。序文にて示される語り手の「麻痺した」身体は一種の去勢された状態を暗喩するのである。

しかしながらこの語り手の麻痺した／去勢された身体は緋色の布に記された A の文字との邂逅によって回復することになる。以下は「税関」にお

いて A の文字を見つけたシーンの引用である。

> But the object that most drew my attention, in the mysterious package. ...My eyes fastened themselves upon the old scarlet letter, and would not be turned aside. ...I happened to place it on my breast. It seemed to me ...that I experienced a sensation not altogether physical, yet almost so, as of burning heat; and as if the letter were not of red cloth, but red-hot iron. I shuddered, and involuntarily let it fall upon the floor.（31-32）

語り手はこの文字を見てそれまでの執筆から遠く離れていた生活から軌道修正された感覚を覚え、物語を書く基盤を見つけたと語っている。胸にその文字を当て、そこから身体的に熱い熱を感じる。この熱い熱はリビドーを想起させる上に、書くことと男性性の密接な結びつきを考慮すると、この文字に感じた “red hot–iron” もまた一種の男性的ファルスのメタファーとして解釈できる。語り手はここでもはや去勢された無感覚な状態から脱却するのである。語り手は税関でのこの文字との出会いをきっかけにその文字に様々な空想を思い描く。これが作品執筆に相当する行為であることは言うまでもない。ホーソーンはこの序文の中で、*The Scarlet Letter* を執筆するという行為が自身の作家として復活する契機になったことを疑似的に「税関」の語り手の身体を通して描き出すのである。

さらにこの序文がホーソーンの重要なロマンス論として機能していることも忘れてはならない。「中間領域」(“a neutral territory”)に関する言及は「税関」の中でも最も引用される箇所だといっても過言ではないだろう。

> Thus, therefore, the floor of our familiar room has become a neutral territory, somewhere between the real world and fairy-land, where the Actual and the Imaginary may meet, and each imbue itself with the nature of the other.（36）

現実と空想の交わる空間こそがロマンスを作り出すのに最も適した空間であることを語り手は語る。ここでホーソーンが自身のロマンスに対する考え方を定義づけていることは彼が自身をロマンス作家として定義づけていることに外ならない。言い換えるとホーソーンはロマンス論をこの序文で言及することによって自身が紛れもなく作家であることを強調しているのである。「税関」の語り手は先祖の姿を借りて作家としての自分のことを "A writer of story−book! ...Why, the degenerate fellow might as well have been a fiddler!"（10）と卑下しているが、彼はそれと同時に A の文字の邂逅を通して自分の作家性をフィクショナライズする。ホーソーンは *The Scarlet Letter* の序文で作家として再生する語り手を創作し、そしてロマンス論を展開することによって自分の作家としてのアイデンティティを必死に確立しようとするのである。

このように序文だけ見ればホーソーンが作家としてのアイデンティティと折り合いをつけて作家として復活を遂げたように見えなくもない。しかしながらホーソーンの作家としての葛藤は必ずしも解消されたわけではない。この作家としての葛藤はチリングワースの歪んだ身体に引き継がれることとなるのである。例えばこの葛藤の中には市場や大衆との関係性も含まれていたかもしれない。マイケル・T・ギルモアはホーソーンが *The Scarlet Letter* をベストセラーにしなければならなかったことを指摘する。つまり金銭的困窮にあったホーソーンにとってこの作品は売れる作品でなければならなかった。それは市場や大衆への迎合の必要性を意味し、自身の芸術性と向き合うことを意味する。ギルモアはこの作品が「市場向けにものを書く際に自己の芸術を歪曲することと折り合いをつけようとする作品である」（72）と結論付ける。結果的に *The Scarlet Letter* は高い評価を受けホーソーンはその後も作家として活動していくことになるが、執筆当時作家として葛藤があったことは想像に難くない。ホーソーンはこの後 *The House of the Seven Gables*（1851）、*The Blithedale Romance*（1852）、*The*

Marble Faun（1860）という 3 つの長編作品を残しているが、これら 3 つにそれぞれ付随する序文の中では全て少なからずロマンスというジャンルに関する言及が為されている。ホーソーンにとって自分の作風と向き合うことは至上の命題であったことが窺える。こうして *The Scarlet Letter* の序文における作家再生のプロットとロマンス論もまた一種のホーソーンの作家としての抵抗として解釈できるのである。

2. チリングワースのセクシュアリティの逸脱

> 家庭の暖かみを求めたがゆえに「暗い必然」に流され、「許されざる罪」に落ちてゆくチリングワースは、「仇役」ではあっても、作家にとってはついつい共感から筆に力の籠もってしまう存在だったことであろう。それは芸術家ホーソーン自身が陥ったかもしれない人生の恐るべき可能態でもあった。（147-48 丹羽）

丹羽隆昭は『恐怖の自画像』の第五章『緋文字』の中でホーソーン作品に頻繁に登場する「許されざる罪」のモチーフとチリングワースを結び付け、彼をホーソーンの作家的自画像として解釈している。この「許されざる罪」には作家が作品を執筆する上で他者の心理を覗き込むことが含まれている。丹羽はさらに「容赦なく心の中を探求する医者こそは、倫理という足枷がなければ到達したかもしれない、作家にとっての理想態と言うこともできる」と語っており、やはり「覗き」がホーソーンにとって作家的行為であったことは間違いない。それを裏付けるかのように、事実ホーソーンは「覗き」というテーマを作品の中に多数盛り込んでいる。最もそれが顕著に表れるのが “Wakefield” であろう。この作品は夫がある日突然妻の元から消えて向かいの通りに仮住まいを借りてそこから 20 年間妻のことを覗くことになる物語である。産業化によって 19 世紀の社会は都市化が

進み、人々の生活は個室という壁に区切られるようになり、結果として覗きの欲望が生まれることになる。このような過渡期にあった時代の中で作家としてホーソーンもまた自身の覗きの欲望を自覚していたことは明らかだろう。だからこそウェイクフィールドや “The Birth–Mark” のエイルマー博士といった人物たちが生まれたのである。彼らは他者の心理の奥深く、そして時に身体の中まで覗き込む。そしてチリングワースもまた彼らと同じく覗きの欲望を体現する人物として描かれるのだ。

忘れてはならないのはこの覗きの視線は常に男性を主体としている点である。ホーソーンやポーなど 19 世紀当時は覗きをモチーフとした作品はいくつも描かれているが、覗きの特権は常に男性にあり、そして同時にそれは男性的な欲望とも複雑に関係している。ピーター・ブルックスは “The desire to know is constructed from sexual desire and curiosity”（5）と述べており、身体を明らかにしようとする欲望、認識しようとする欲望にエロティックな欲望が秘められていることを語る。覗きの欲望が作家的欲望であると同時にホーソーンにとって男性的欲望とも重ね合わされていたことは “The Birth–Mark” でエイルマー博士が催眠術を用いながら一方的にジョージアーナの身体を凌辱していることからも窺える。だからこそホーソーンにとって「覗き」とは作家として、男性として「許されざる罪」を象徴する行為なのである。

このような視点から *The Scarlet Letter* を読み直すと、チリングワースの欲望が如何に倒錯したものであるかが見えてくる。彼は元々ヘスターと家庭を築くことを夢見ており、ヘスターとの面会のシーンではそれがまるで理想であるかのように語る。“My heart was a habitation large enough for many guests, but lonely and chill, and without a household fire” そして “And so, Hester, I drew thee into my heart, into its innermost chamber, and sought to warm thee by the warmth which thy presence made there”（74）と話す姿からはチリングワースの中に存在する社会規範的な理想の男性像が窺える。炉端の火

は家庭を象徴し、その火が灯ることこそがチリングワースが求めていたことだと言えるだろう。さらに “I betrayed thy budding youth into a false and unnatural relation with my decay”（75）という台詞は美しく若いヘスターを老いた醜い自分という朽木に繋いでいたことを懺悔するシーンであると同時に、「咲きかかった蕾のような若さ」（“the budding youth”）を「我が腐食」（“my decay”）に繋ぐという表現からは彼のヘスターに対するヘテロセクシュアルな欲望もまた垣間見える。しかしながらこの願望が叶うことは決してない。こうして行き場のない欲望は復讐の対象であるヘスターの姦通の相手、すなわちディムズデールへと向けられることになる。

ディムズデールは若く将来有望な男性であり容姿も際立っている。明らかにチリングワースと対照的な人物として意図的に描かれていることが分かる。この対照的な二人が医師と患者として出会い、そしてチリングワースが医療を口実にディムズデールの身体を暴くシーンは非常にセンセーショナルで官能的な描写になっている。

> So Roger Chillingworth—the man of skill, the kind and friendly physician—strove to go deep into his patient’s bosom, delving among his principles, prying into his recollections, and probing every thing with a cautious touch, like a treasure-seaker in a dark cavern.（124）

チリングワースは患者（ディムズデール）の胸深くに忍び込み、中を慎重に触れながらあらゆるものを覗き込み、明らかにしようとする。例えばスコット・デリックはこのシーンをチリングワースが椅子の上で眠るディムズデールの衣服を剥ぎ、“ghastly rapture” と “ecstasy” を感じたシーンであることを根拠として疑似的なレイプシーンとして解釈しているし、丹羽は「医者の行為はまた、一種暴力的な凌辱行為（つまり「レイプ」）」と述べ、従来の研究においてはこのディムズデールの正体が判明するシーンにおける

チリングワースのホモセクシュアルな行為の重要性が言及される。作中冒頭のシーンでチリングワースが語ったヘスターへのヘテロノーマティヴな欲望は倒錯し、規範から逸脱し、ディムズデールへのホモセクシュアルな行為へと転換されるのである。その動機が復讐であれ、理想の男性性への憧憬の裏返しであれ、チリングワースの deformity は外見的な見た目のみならず、当時の規範的なセクシュアリティからの逸脱をも表象するのである。

チリングワースはヘテロセクシュアルな規範とホモセクシュアルな逸脱との境界線上に曖昧に揺れ動く。作家的な「覗き」の欲望を体現しながら彼はヘテロノーマティヴな社会規範から逸脱する。アンリ・ジャック・スティケールは 19 世紀の「奇形」や障害を持った身体の社会的扱いについて論じながら、「当時、社会や人間の事象を「平均値」ではかるアプローチが広がっていた」（332）と語る。ローズマリー・ガーランド・トムソンは社会におけるディサビリティの形成に関して論じた *Extraordinary Bodies* の中で身体的異常性を持ついわゆる「フリーク」について “The freak simultaneously testified to the physical and ideological normalcy of the spectator and witnessed the implicit agreement assigning a coercive deviance to the spectacle.”（62）と語っている。フリークが観客の身体的・イデオロギー的な正常性の試験紙になるというのである。身体的であれ精神的であれ規範から逸脱する異常性は規範に従う正常性と表裏一体であることは間違いない。だからこそ作家的特性を持つチリングワースを描き、彼の身体やセクシュアリティを歪めることもまたホーソーンにとって自身を顧みる行為に違わない。ホーソーンの男性として、そして作家として規範から逸脱してはいないかという葛藤こそがチリングワースの両肩の異なる身体やセクシュアリティの両義性に映し出されているのである。

3. ディムズデールの去勢からの回復

丹羽はチリングワースに関して「それは芸術家ホーソーン自身が陥ったかもしれない人生の恐るべき可能態でもあった」（148）と語っているが、ディムズデールもまたホーソーンの「可能態」であった可能性はないだろうか。先にも述べた通り、ディムズデールの姿はチリングワースとは対照的な描かれ方をしている。チリングワースが規範から逸脱する男性像を象徴するならば、ディムズデールは（少なくとも表向きは）社会規範的な理想の男性像を体現するようにも見える。若く、将来も保証され、見目もよく、そして姦通相手とはいえヘスターと共に家族を形成するのがディムズデールである。そして物語の終盤では選挙祝賀の原稿を執筆する姿も見せており少なからず「書く」という作家的行為を踏襲している。本章ではディムズデールの姿にホーソーンの作家としての理想の男性像が断片的に投影されていることを論証し、彼の身体表象に言及しながらチリングワースとは対をなすホーソーンの作家としての可能性を秘めていることを明らかにしていきたい。

冒頭で登場するディムズデールの姿は先に述べた通りその身体の男性性が強調されており、若さ、将来性、そして何よりそれに伴う信頼された道徳観を兼ね備えた男性として描写される。しかしこのディムズデールの男性性は結果的に挫かれることになる。“with every successive Sabbath, his cheek was paler and thinner, and his voice more tremulous than before”（122）という様子からは彼が規範的な理想の男性像から逸脱していく様子が見て取れる。この衰弱はヘスターの晒し台のシーンの後から見られるようになるが、やはり一番のきっかけとなるのはチリングワースの治療であり、それを契機に衰弱の進行が際立っている。“While thus suffering under bodily disease, and gnawed and tortured by some black trouble of the soul, and given over to the machinations of his deadliest enemy.”（141 下線は論者による）これはチリングワースによって身体を暴かれた後の引用だが、とりわけこのレイプ

シーンからディムズデールの身体と精神は共に弱々しくなっていくことになる。

夜に晒し台の下へと半分夢のような感覚でやって来た牧師の姿は “Poor, miserable man!”（148）と語られる。冒頭で強調された彼の輝かしい男性性はもはや存在しない。チリングワースの倒錯的なレイプ行為は結果としてディムズデールにとって彼の男性性を奪う去勢として機能するのである。古くより姦通を始めとし、性的な罪を働いた罪人には去勢という罰が執行されてきた。1778 年にトマス・ジェファソンもまた次のような法律を定めている。

> Whosoever shall be guilty of Rape, Polygamy, or Sodomy with man or woman shall be punished, if a man, by castration, if a woman, by cutting thro’ the cartilage of her nose a hole of one half inch diameter at the least.（Boyd 492）

そもそもチリングワースの行為が医師による治療であることを前提とすると、彼の行為を性的な罪を犯したディムズデールへの去勢として解釈をすることは妥当ではないだろうか。さらに彼の衰弱した姿を語り手が何度か “ethereal” “etherealized”（141）といった言葉で形容していることも興味深い。文脈的な意味としてはディムズデールの姿に俗世から離れた天上の世界、精神世界へと昇華される姿を見出しているのだろう。男性的な欲望と身体が切り離されていることが窺える。さらにこの “ethereal” “etherealized” という言葉はその他にも「エーテルを吸入した状態」を指すこともある。この作品に身体のまなざしを向け、さらに *The Scarlet Letter* 執筆直前の 1846 年にエーテルを使った史上初の全身麻酔下における公開手術が実施された事実を合わせて考えると etherealized に多重の意味が見えてくる。つまり、まるで麻酔がかかったかのように身体から刺激への反応や活力を失ったディムズデールの様子が「精神化した / エーテルを投与された」

（etherealized）という言葉で形容されているのである。

しかしながらディムズデールは失った男性性を取り戻すことになる。彼は終盤、森でヘスターやパールとの邂逅を果たした後、選挙祝賀の説教原稿の執筆に取り掛かる。高野泰志はこのシーンを「「書くディムズデイル」が「書くホーソーン」を投影した姿であることは間違いないだろう」と解釈した上で彼がペンを握る姿に「ヘスターを欲望する／マスターベーションをするディムズデイル」の姿が描きこまれていると解釈している（155）。ディムズデールは去勢された無感覚な身体から回復していくのである。彼が活力を取り戻し始めるのは森でヘスターやパールと会話をした後からだが、この森はチリングワースの監視の及ばぬ土地であり、彼の身体を貫く視線からディムズデールを守る役割を果たしていると言える。ギルモアは *The Scarlet Letter* における公衆の視線と視線に晒される客体の関係について市場原理を用いながら論じており、ディムズデールもまた説教壇やチリングワースとの関係から公衆に見つめられる存在であると結論付けている。しかしこの森の中では誰の視線にも晒されることなく、ヘスターやパールと言葉やキスを交わし、家に戻るや否や我を忘れてペンを握るのである。もはや去勢されたディムズデールは存在せず、パールもまたニューイングランドの祝日の舞台ディムズデールに対して “was that the same minister that kissed by the brook?”（240）と森で出会った牧師と同じ人なのかと疑問を抱いている。ディムズデールは去勢から脱却し男性性を取り戻す。

この一連のディムズデールの身体を巡る流れは「税関」の序文の語り手の身体の物語と同じく、去勢から回復し、男性性と作家性を取り戻す構造になっている。さらに物語の最後では最終的にこれまで隠し通してきたヘスターとの関係性を公開し、晒し台の上に共に上がって疑似的に家族を形成する。このディムズデールの姿もまたホーソーンの作家としての一つの可能性を描き出しているのではないだろうか。つまり公衆の視線に抑圧され、市場原理や作家性との間で苦悩している状況から抜け出しながら家族

を形成するディムズデールの姿にホーソーンの願望が見え隠れするのである。家庭から遠ざかり、自分の知的好奇心を満たすことに傾倒し歪んでいったチリングワースとは対照的な結末であると言えよう。作家の自画像として描かれるチリングワースはこの様子を晒し台の下から傍観している。ヘスター、パール、ディムズデールとチリングワースの間には晒し台という明確な境界線が引かれその対照性は強調される。皮肉なことに晒し台の上でディムズデールはチリングワースが望んだ家族を形成し、そしてそれをチリングワースは阻害された存在として眺めることしかできない。チリングワースの目にはディムズデールの姿は彼が望んだ男性像として映り込んだかもしれない。そして同時にこの姿は大衆や社会規範の抑圧から脱して男性性を取り戻し、家族を形成するというホーソーンにとっての理想像でもある。このように物語の終盤のこの晒し台の場面にはチリングワースとディムズデールというホーソーンの作家としての対照的な 2 つの可能態が描きこまれているのである。

まとめ

The Scarlet Letter はホーソーンにとって身体へのまなざしの転換期の作品であると言える。1842 年にソファイアと結婚し、1844 年にユーナとジュリアンの出産・誕生を経験し、そして 1849 年の母の病による他界というホーソーンの人生の中でも激動の時代を経てこの作品は生まれている。家族という存在が生まれ、自身が父親になったこともまた彼の作家としての在り方に影響を与えたことは間違いない。ランダル・スチュワートによると彼は *The Scarlet Letter* に関して執筆開始から六か月以内には印刷者の手に原稿の全てを渡したという（Stewart 94）。ホーソーンのこの執筆活動に対して妻であるソファイアは “He writes immensely, ...I am almost frightened about it. But he is well now and looks very shining.”（93–94）と語る。この急激なホーソーンの執筆への熱意の高揚は作中の森でヘスターと密会をした

直後のディムズデールを思い起こさせる。フレデリック・クルーズは最後の公衆の前での告解のシーンのディムズデールに関して “His libido is now free, not to attach itself to Hester, but to be sublimated into the passion of delivering his sermon and then expelled forever.”（Crews 148）と語る。ディムズデールのリビドーが解放され、晒し台の上で死に果てるのと同じように、ホーソーンもまたとりつかれたかのように短い期間で *The Scarlet Letter* を書き上げることでエクスタシーを覚えるのである。しかしながら先にも述べた通り、ホーソーンはこの後も自分の作家性と向き合い、葛藤していくことになる。ホーソーンの葛藤は終わることなくずっと彼の執筆に付きまとっていくことになる。物語の終盤でディムズデールを傍観するチリングワースの視線はホーソーン自身の作家としての視線だったのかもしれない。

ブルックスは身体を表象することに関して “representation of the body is part of representing “external” reality as a whole”（3）であると語る。身体にはその身体の外側の現実を表象する力がある。故に *The Scarlet Letter* や他の作品の身体表象の解釈を模索することはメタフィクショナルなレベルに存在するホーソーンの作家としての在り様を読み取れる可能性を提示しているのではないだろうか。

引用文献

Bell, Millicent. *Hawthorne’s View of the Artist*. the State University of New York, 1962.

Boyd, Julian P., editor. *The Papers of Thomas Jefferson.* vol. 2, Princeton UP, 1950, pp.492–507.

Brooks, Peter. *Body Work: Objects of Desire in Modern Narrative.* Cambridge: Harvard UP, 1993.

Crews, Frederick. “The Ruined Wall” *The Sin of the Father.* Oxford UP, 1966, pp. 136–53.

Derrick, Scott S. ""A Curious Subject of Observation and Inquiry": Homoeroticism, the Body, and Authorship in Hawthorne's "The Scarlet Letter."" *Novel: A Forum on Fiction*,Vol. 28, No. 3, 1995, pp.308–26.

Foucault, Michel. *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*. Translated by Alan Sheridan, Vintage Books, 1995.

Gilmore, Michael T. *American Romanticism and the Marketplace*. Chicago UP, 1985.

Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*. 1850. *CE*, vol. 1, 1962.

Healy, Meghan. "Weak–Willed Lovers and Deformed Manliness". *The Gaskell Journal*, Vol. 28, 2014, pp.17–34.

Olivier, Marc. "Typewriter." *Household Horror: Cinematic Fear and the Secret Life of Everyday Objects*. Indiana UP, 2020, pp. 211–36.

Stewart, Randall. *Nathaniel Hawthorne: A Biography*. Yale UP, 1948.

Thomson, Rosemarie Garland. *Extraordinary Bodies: Figuring Physical Disability in American Culture and Literature*. Columbia UP, 1997.

コルバン, アラン編『身体の歴史 II——19 世紀フランス革命から第一次世界大戦まで』小倉孝誠訳, 藤原書店, 2010.

コルバン , アラン「身体の痛み、苦しみ、および悲惨」渡辺響子訳, コルバン『身体の歴史』, pp. 257–324.

スティケール、アンリ＝ジャック「障害のある身体の新しい捉え方」和田光昌訳 , コルバン『身体の歴史』, pp. 327–49.

ゼルネール、アンリ「芸術家たちのまなざし」真屋和子訳, コルバン『身体の歴史』, pp. 103–45.

高野泰志『下半身から読むアメリカ小説』, 松籟社, 2018.

丹羽隆昭『恐怖の自画像—ホーソーンと「許されざる罪」』, 英宝社, 2000.

フェンスター、ジェリー『エーテル・デイ——麻酔法発明の日』安原和見訳, 文春文庫, 2002.

教材研究ノート

18 世紀英国文化「謎解き」の旅
（イェール大学から宮城学院女子大学へ）
―肖像画《ヒル夫妻》をめぐって―

吉村典子

はじめに
1.《ヒル夫妻》に描かれたもの
1-1.　描かれた道具：茶道具として
1-2.　描かれた道具：手芸道具として
1-3.　描かれた手芸：ノティングもしくはタティングとして
2.《ヒル夫妻》にみる 18 世紀英国文化
2-1.　日常性
2-2.　インテリア
2-3.　服飾と人物の所作
おわりに

はじめに

2023 年夏、イェール大学・招聘研究員として、北米最大の英国美術コレクションを有する同大学の英国美術研究所（Yale Center for British Art：以下 YCBA と表記）に属し、調査・研究・公開講演等に約 3 か月間従事することができた。研究課題は、戦後を中心とした 20 世紀英国美術であるが、本学英文学科文化系の授業で扱う 16 世紀～ 19 世紀の美術資料も YCBA には潤沢にあり、教材研究も折に触れて進めることにした。前者については別稿で論じることにし、本稿では後者の中から 18 世紀美術について報告したい。本学英文学科生が、イェール大学で「謎」となっていたことの解明に重要な役割を果たしてくれたからである。

その切っ掛けとなった作品は、YCBA 所蔵の英国 18 世紀の肖像画《ヒル夫妻》（図 1）である。この絵画上には人物のほか、服飾、インテリア、

図 1　アーサー・デヴィス作《ヒル夫妻》, 1750–51 年頃, 油彩, 76.2×63.5 cm
所蔵：Yale Center for British Art, Paul Mellon Collection.

嗜好品等が描かれているため、当時の風俗や生活文化を読み取ることができる第一次資料として、本学の授業でたびたび取り上げてきた。これまでは、美術書等の掲載図版を通して学生に紹介してきたが、このたびのYCBA での在外研究により、実見が可能になった。すると、美術書等の図版では視認することはなかった 1 本の糸が、夫人の右手から左手にかけて描かれていることが見えてきたのである（図 2)。この糸は何か。糸の延長線上にある右手にもつ道具は何か。

帰国後、本学の授業で、拡大写真を見せながら、実見の経過と、絵の中で夫人がする手芸等については調査中であることを報告すると、受講生の一人が「タティングではないか」、「自分は幼い時にしたことがある」と申

図 2　図 1 の部分
夫人の右手と左手の間に白い糸が見える。
テーブルの上は、カップ＆ソーサーと揃いの柄の茶零し（右奥）、砂糖入れ（左奥）、中央のティーポットの向こうに銀製のクリームジャグとその隣にあるのは、恐らくスプーントレイ。

し出てくれたのである。この情報が切っ掛けとなり、さらに調べていくと 18 世紀の貴族文化としてのそれもが見えてきた。YCBA での「謎」が、宮城学院女子大学で解き明かされるまでの「旅」を報告し、本作を通して改めて 18 世紀の英国文化をここに示してみたい。

1.《ヒル夫妻》に描かれたもの

1-1.　描かれた道具：茶道具として

1750–1751 頃に制作された《ヒル夫妻》は、英国のトーリー党の法廷弁護士（George Hill, 1716–1808）と妻（Ann Barbara Hill neé Medlycott, 1720–c.1800）を描いたアーサー・デヴィス（Arthur Devis, 1712–1787）による肖像画である。

英国における肖像画は、テューダー朝（1408–1603）の時代に王侯貴族を対象に盛んに描かれるようになる。宗教改革や絶対王政が進むにつれて、宗教画から肖像画へと需要が変化したことも背景にあるであろう。王侯貴族の肖像画には正面性を強調した威厳に満ちた表現が多数見られるが、18 世紀になると本作のように上流階級の日常のくつろいだ様子を描くスタイルが流行する。あたかも歓談時のような何気ない様子が描かれていること

からか、この種の肖像画は「カンヴァセーション・ピース」（conversation piece）と呼ばれている。日本では「団欒肖像画」と訳され（本稿でもこの語を使用する）、英国 18 世紀の絵画のスタイルの一つに位置付けられてきた。デヴィスは、300 点以上の団欒肖像画を制作したと言われており[1]、1745 年には、自身のスタジオをロンドンに設立していることから、本作は肖像画家として確立し、名声を得た時代のものと言うことができる。

ヒル夫妻の夫ジョージの前掲の職業[2]からしても、所謂「ジェントリー」にあたり、社会的地位は高いものであるが、描かれている風俗からも上流階級の暮らしを思わせる。その一つが茶事である。夫人の横のテーブルの上には、7 客のティーカップとソーサーが並んでいる。茶は 17 世紀に中国茶が英国に運ばれると王侯貴族を中心に喫茶の習慣が浸透していく。やがて中産階級にも広がり、価格の低下や英国によるインドでの茶の栽培の開始等も手伝って、19 世紀には労働者階級へと普及するが、それまでは、茶は限られた範囲で享受される嗜好品であった。新大陸から運ばれるようになった砂糖も然りである。

茶事の亭主は女性であり（テーブル上の道具も夫人側に寄せられている）、砂糖の塊を砂糖挟みでゲストに給仕するのは茶事の見せ場であったと言う。そのためか、精巧に装飾された砂糖挟みが当時製造されていた（図 3）。そして、団欒肖像画《ヒル夫妻》の夫人の右手に持つ道具は、「砂糖挟み」であると伝えられ、本学の授業でも、それとして紹介してきた。

このたびの YCBA での在外研究は、この細部も確認できる絶好の機会であり、YCBA 職員の計らいで至近距離からの実見調査が可能となった。そして、夫人の手元を注視すると、確かに砂糖挟みのように、二股に分かれてはいたが、同時代の砂糖挟みに近似する形状ではない。また、砂糖を

[1] Angus Trumble, “Arthur Devis, 1712–1787, British, Mr. and Mrs. Hill”. https://collections.britishart.yale.edu/catalog/tms:101

[2] 地主階級（the gentry）の長男は土地を相続し、次男以下は法律家や聖職者、軍人等になることが多かった。貴族とともに、英国上流階級を構成した。

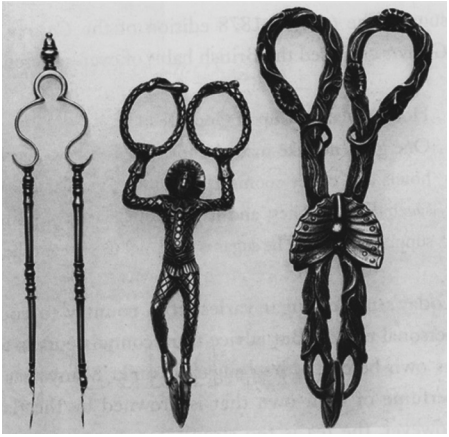


図 3　砂糖挟み
左から 1726 年，1798 年，1730 年制作
出典：Jane Pettigrew, *Design for Tea*, Sutton Publishing, 2004, p.113.

給仕する「見せ場」とすれば、5 人のゲストは描かれていないことに改めて気づく。そしてなによりも実見により視認できた 1 本の糸から、その道具が砂糖挟みではなく、糸と関連する道具であることを確信したのであった。

1–2　描かれた道具：手芸道具として

ではこの道具は何か。より近づいてみると、二股に分かれたその間にくぼみがあり、糸を巻き付ける箇所のようにも見える。舟形に見える形状はシャトル（杼）を想起させる。しかし、シャトルと言えば、織物を作る際の機織用具の一つであり、経糸の開口した間を、緯糸を入れて左右に飛走する、また、それが飛びやすいように、左右先細の舟形になっているものである。類似するも、絵画には織機は描かれていない。さらに、ピンと張った糸が繋がる左手を見ると、その糸で輪奈をつくっている。膝の上で左右の手だけで行う手芸なのであろう。恐らく、太古の昔から漁師等が網を作る際に使われていた網針（あぼり）のように、この道具で編上げていくものと考えられる。従って、織物ではなく編物のための道具と言うべきである。

YCBA 学芸員のランフィア氏（Abigail Lamphier）、そして、筆者と同時

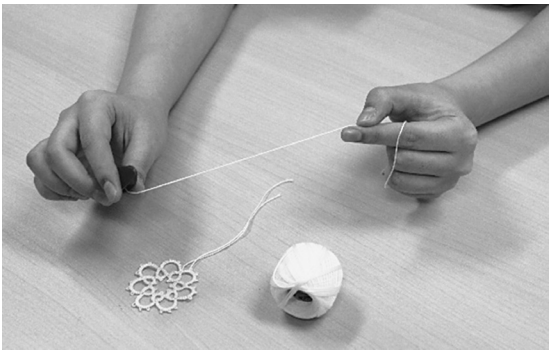


図 4　タティングをする佐藤美紅さん
手前の花型は佐藤さん作で、10 分程で作成できると言う。
（撮影：木川奈緒・英文学科副手）

期の招聘研究員で 18 世紀美術を専門とする英国ノッティンガム大学のチャン教授（Ting Chang）とともに作品を目視し、「糸」のように見える線は、表面の亀裂等によるものではなく、意識的に描かれた線であることを確認した。しかし、夫人が右手に持つ道具については解明できないまま、滞在期間は過ぎていった。

帰国して、本学学生たちに、「砂糖挟み」ではないことと、実見により新たに視認された線について説明し、夫人の持つ道具は何か、そして、どのような手芸を行っているかの解明は今後の課題であると伝えると、受講生の一人佐藤美紅さん（当時英文学科 2 年）が「タティングではないか」と情報を提供してくれたのであった。聞けば、一部ではよく知られた手芸であると言う。早速、その言葉の響きから推測して “tatting” として英和辞典を引いてみると「糸をシャトルを使って編む、曲線模様を持つレース編み」とある。そして、近隣の手芸用品店に行くと、一定のスペースが「タティング」の為にとられており、複数の教本も並べられていた。日本においても確立している手芸の一つであることがわかる。早速、糸とシャトルを購入し、佐藤さんに制作を依頼すると、肖像画にあるような持ち方で、

図 5　ジャン＝エティエンヌ・リオタール（1702–1789）によるマリー・アントワネット（7 歳頃）の肖像画，水彩，パステル等，1762 年，32×25.5 cm
出典：“Jean–Etienne Liotard 24 Oct 2015–31 Jan 2016 at the Royal Academy of Arts in London,” *MEER*, 23 Oct. 2015.（https://www.meer.com/en/17992–jean–etienne–liotard）

すいすいと編上げていく（図 4）。

さらに、インターネット上を “18th century”, “portrait”, “tatting” で検索すると、シャトルと糸をもつ、女性の肖像画が次から次へと出てくるのである。描かれている人物や風俗から、貴婦人の嗜みとしてのそれであることがわかる。なかにはマリー・アントワネット（Marie Antoinette,1755–1793）がシャトルをもつ肖像画もある（図 5）。こうした事例からも、18 世紀肖像画の女性の典型的な持物と言っても過言ではないのである。

さらに、肖像画のシャトルに着目すると、装飾細工も描き込まれている。それ自体が工芸品と言えるほどである。実際、英国の美術工芸博物館収蔵品を調べてみると、必ずといってよいほどシャトルがそのリストに挙げられ、繊細な金工やエナメル彩が施された 18 世紀のシャトルも確認できる（図 6）。

興味深いもう一つの点は、シャトルを持つ手と反対の手首に小袋が掛け

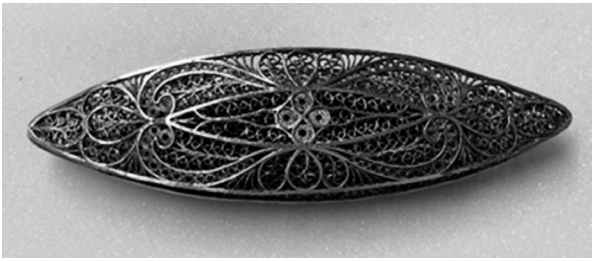


図 6　銀のフィリグリー（線細工）のシャトル，1750–1799 年，英国製，3×9.5×0.9 cm
所蔵：Victoria & Albert Museum, London

られている様子が殆どの作例に描かれていることである。多くが引き紐付きの小さなハンドバッグ状のものである。バッグがないと、糸玉が描かれている（図 7）ことから、ハンドバッグはそれを入れるものであると考えられる。バッグから出ているように描かれている糸もある（図 8）。

シャトルも入れて持ち歩いては、室内で、場合によっては庭で、余暇の楽しみとしてなされていたことも想像できる。当時、女性用の小型ハンドバッグは、レティキュール（reticule）と呼ばれていて、辞書には「引き紐がつき、刺繍やビーズ飾りのあるものが典型」とあるが、その中にはこうした糸や道具が入っていたとも考えられる。

描かれたバッグには、細やかな装飾が施されたものがあるが、なかにはドレスと揃いの素材と装飾のものも見られる[3]。これらは手芸のためのものであるにしても、前掲のシャトルのことを含めて考え合わせると、宝飾品に匹敵するような装身具としての役割も果たすものであったと思われる。また、こうした肖像画には、編まれたレースを描くものは多くは見られない。このことからも、絵画上のそれは、技能を表すというよりは、貴

[3] 次の作品には、胴着、ペティコート、レティキュールの布地が、揃い刺繍やアプリケ装飾で描かれている（JeanMarc Nattier, *Marie−Adélaide of France*,, 1756, Oil on Canvas, 90×75 cm, Réunion des Musées Nationaux, Grand Palais, Versailles, France.）

図 7　コワペル（Charles–Antoine Coypel,1694–1752）作，夫婦像（おそらくジュリエンヌ夫妻），1743 年，パステル，水彩，100×80 cm
所蔵：The Metropolitan Museum of Art, N.Y., USA

図 8　デクール（Michel Pierre Hubert Descours, 1741–1814）作、エリザベス・ド・ラ・ヴァレ・ド・ラ・ロッシュの肖像，1771 年，油彩，80×63.7 cm
所蔵：The Bowes Museum, Durham, England

婦人としての嗜みやステイタスを示す意図であったと言うべきだろう。これらを描く絵画が多数確認できたことから、貴婦人の持物の典型であり、それは肖像画の定式の一つであったと位置づけられるのである。

1–3.　描かれた手芸：ノティングもしくはタティングとして

英文学科生の佐藤さんの話を、ランフィア学芸員、チャン教授に伝えると大変感激され、チャン教授は "tatting" を手掛かりに、この手芸に関する論文を調べて送ってくださった。染織史家カリー・カープ氏の論考[4] は、当時の文献資料を提示しながら、これらの手芸に対してどのような言葉を用い、どのように説明されていたかを明らかにする。それによると、糸とシャトルを使って編上げていく手芸に関しては、17 世紀末には、「ノティング」（knotting）という語を使う例がある。ノティングをする女王を称えるオード[5] もある。ノティングは、その名が示すとおり、結び（knot）飾りを編み上げていくもので、それを衣類や家具用ファブリックに縫い付ける装飾に用いたと言われている。

やがて、様々なレース編みも含めて、19 世紀頃からは「タティング」という語が使われ出す。カープ氏によれば、この 2 つの語の間で厳密な使い分けはなされていないと言う。一方で、「タティング」を説明する 1800 年代の文献掲載図版をみると（図 9）、佐藤さんが「タティング」として修得した編み方と一致している。おそらく、19 世紀に「タティング」として広がった手芸が、日本にも普及したと思われる。一方、日本で「ノティング」と言うと、小規模な織機を用いた手織りの名称として使われているようである。以上のことから、18 世紀の肖像画に描かれている手芸は、今日の日本でいう「タティング」に近いものであると言ってよいであろう（以下、本稿では、この手芸については「タティング」という語を用いる

[4] Cary Karp,"Knotting and Tatting: The Dual Role of the Shuttle as a Fashion Accessory and Instrument of Decoration," *The Journal of Dress History,* Volume 5, Issue 2, Early Summer 2021.
[5] Ibid., p.10.

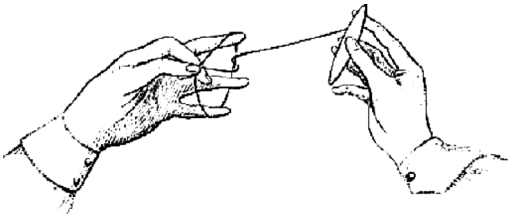


図 9　1842 年の教本（*The Lady's Assistant in Knitting, Netting, and Crochet Work*）掲載の「タティング」の図
出典：Cary Karp,"Knotting and Tatting: The Dual Role of the Shuttle as a Fashion Accessory and Instrument of Decoration," *The Journal of Dress History*, Vol. 5, Issue 2, 2021, p.31.

ことにしたい）。

2.《ヒル夫妻》にみる 18 世紀英国文化

2-1. 日常性

糸や道具、そして手芸についての「謎」が解けたところで、改めて絵画全体を見てみよう。すっきりとした室内に二人を配置させ、精緻な人物や衣装、小物等の表現で際立たせ、構図は立像と座像で変化とともにバランスが保たれている。画面に向かって左手前から柔らかな日の光が差し込み、その光により人物が自然に際立つような表現がとられている。室内においても装飾を抑え、落ち着きのある洗練された上流階級の日常の雰囲気を思わせる。こうしたさり気なさが、それまでの王侯貴族の威厳を表すような肖像画と一線を画す、団欒肖像画と呼ばれるものの特質である。

「日常の雰囲気」は、画面上に設定された室内の様子にもよるが、何かの途中、あるいはその動作が直前までなされていたことが描き込まれていることによるであろう。夫人の例を上げれば、「タティング」ということになる。一方、夫について見ると、彼の背後の炉棚の上には、1 冊の本があり、あたかも読書中に一時的に置いたように手なりに斜めに描かれてい

図 10　図 1 の部分（筆者撮影）　炉棚の中央より右に書籍が描かれている。

る（図 10）。ルネサンス期の活版印刷の確立により出版活動が活性化するも、文庫本もペーパーバックもないこの時代は、限られた層の間で享受でき、所有できるものだった。「タティング」についても、それをすることのみならず道具を持つこと自体も一種のステイタスであったが、それらがさり気なく描かれているところが、当時の上流階級の気品ある日常を示すことに繋がっている。実際、夫ジョージは、かなりの学識があり、判例法の並外れた知識で高い評判を得ていた[6]。物品は「ステイタス」や所謂「誇示的消費」を示すものと捉えることができるが、こうしたヒル氏の評判からすると、周りの物品とは、ごく自然な関係性があったとも考えらえるのである。

2–2. インテリア

インテリアに目を向けてみると、人物の背景としてのこれらは、絵画表

[6] 膨大な知識量で知られる法律家であったが、事件の記憶力に圧倒され、そこから明確な一般原則を引き出すことができず、「迷宮弁護士」（Serjeant Labyrinth）というニックネームが付くほ

現上の理由もあろうが、全体にシンプルな様相を呈している。実際にも、18 世紀初頭から英国では、パッラ―ディオ主義[7] に象徴されるように、古代ギリシア・ローマを源泉とした簡潔な造形が流行している。絵画の左手前にはっきりと描かれている腰長押の繰型は、人物の背後へと続くが、古代建築のそれを踏襲している。暖炉の炉棚下のデザインも同様である。

こうした幾何学的な様相が簡潔な印象を与えるが、しかし、細部には、後に「ロココの時代」と呼ばれるようになる 18 世紀半ばの典型的な装飾デザインが見られる。額縁や暖炉の縁取りに植物のモティーフをアレンジし、軽快な曲線表現の装飾レリーフがあるように描かれている。緩やかで軽やかな S 字曲線に「ロココ」（rococo）の語の由来となる小石や貝殻型の装飾がちりばめられた「ロカイユ」文様（rocaille）を作り上げている。

この緩やかな曲線は、家具デザインにも見られる。夫婦それぞれに用意された椅子は揃いのものと思われ、夫のそれには脚部が、妻のには背もたれのデザインが見える。脚部は、上部が外側、下部が内側に、そして脚先がまた外側に出たS字の形状のカブリオール・レッグ（cabriole leg）である。18 世紀を通して好まれた形状で、足先には、この絵画の椅子やテーブルのように、鉤爪のある動物の足型（paw foot）もあれば、鳥の鉤爪がボールをつかんだような足（claw–and–ball foot）も典型として挙げられる。また、椅子の背柱のほか、壺型の背板も緩やかな曲線を形成している。この壺型背板（urn shape splat）は、18 世紀初頭、特に、アン女王の時代（1702–14）によく見られ、上述の脚のデザインとともに、後に「クイーン・アン・チェア」とも呼ばれるほどのこの時代を象徴するデザインである。この壺の形状は、テーブルの脚にも見られる。

どであったと言う（*Dictionary of National Biography*, 1885–1900）。リンカーン法曹院のメンバーであり、同院には、ヒル氏のマニュスクリプトが保管されている（https://archives.lincolnsinn.org.uk/documents/39）。

[7] イタリア・ルネサンス期の建築家パッラーディオ（Andrea Palladio, 1508–1580）の古典建築の解釈にならおうとする 18 世紀英国の建築上の立場で、英国のイニゴ・ジョーンズ（Inigo Jones, 1573–1652）の思想と建築がその初期のものとして挙げられる。

実際の壺も、暖炉の炉床に置かれている（図 10 右下）。おそらく炉に火を入れることのない夏季なのであろう。東洋陶磁器は 17〜18 世紀初頭にかけてはヨーロッパで特に珍重されていた。18 世紀中葉から末にかけては、英国においてそれを模したものが製造され、中国趣味の時代を形成し、ロココ時代の特質の一つとなる。炉床の壺は梅瓶（めいぴん）型で蓋には精巧な獅子像も見られ、青磁のような繊細な色合いも表されている。このようなスケールでありながら、細やかな像や色彩表現を持つものは、この時代の英国産のものには見られないことから、ヒル夫妻は、本場の品を所有していたと考えられる。

東洋趣味はテーブル上の茶道具にも見られる。青花（日本でいう染付）もしくはそれを模したカップ＆ソーサーや宜興紫砂茶壺（ぎこうしさちゃこ）[8] を思わせる朱泥のティーポットが描かれている。クリームジャグ等は銀製であるが、18 世紀の上層階級の茶事では、銀器と東洋（風）の陶磁器との組み合わせが見られる[9]。素材は異なるも、焼物の植物の文様と、クリームジャグの S 字の脚や渦形装飾は、前述の室内のロカイユ文様と呼応している。

このように厳格な古典的要素と、軽やかなロカイユ装飾が典雅な室内の雰囲気を表しており、特に後者と呼応するかのように中国趣味がさり気なく加えられている。この時代に発展したカントリー・ハウスの代表例ストウ（Stowe House）[10] やクレイドン・ハウス（Claydon House）[11] もまさにこの様相を呈している。

こうした特質の組み合わせは、この絵画のなかの「絵画」にも見られる（図 11）。遠景の廃墟等の古代風のモティーフ、左右非対称に配された樹木、手前に小さく描かれた人物像があり、これらの要素は、クロード・ロ

[8] 中国江蘇省宜興では、紫砂という均質緻密で、鉄分を多く含む土で、茶褐色の陶器を産出し、その茶壺（ティーポット）は、茶人の間でも珍重された。

[9]『紅茶とヨーロッパ陶磁の流れ』（名古屋ボストン美術館, 2001 年）。同展では、この組み合わせのテーブル・セットが再現展示された。

[10] 18 世紀コブハム家の時代に加えられた部分が今日の中心を成している。古典主義を代表する

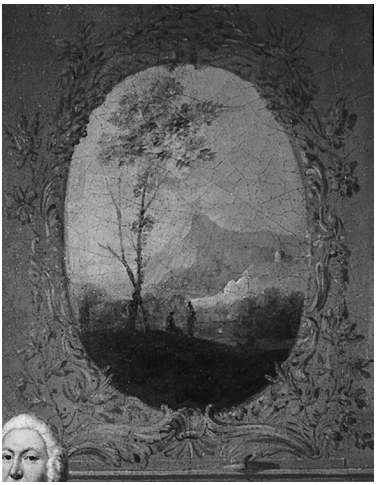


図 11　図 1 の部分（筆者撮影）

ラン（Claude Lorrain, c. 1604–82）等が描くような絵画を思わせる。ロランはフランス生まれであるが、ローマを拠点とした画家である。美術アカデミーが評価する「歴史画」を壮大かつ深遠な風景の中に表し、その人気から「風景画」の地位を高めた[12] と言われる人物である。英国人にとっては、17 世紀から盛んになる「グランド・ツアー」（the grand tour）でその世界と流行に触れることになる。上流階級の子弟が教育の仕上げとして出かけたのは、芸術の中心フランスやイタリアであった。以降、こうした絵を鑑賞できること、あるいは所有することが貴族としての嗜みの一つとも

ロバート・アダム（Robert Adam, 1728–1792）等がこの時代の建築やインテリアデザインを手がけた。現在はナショナル・トラストにより管理されている（所在地：Buckingham, Buckinghamshire, England）。

[11] 1620 年以来ヴェルニー家の邸宅であり、その殆どは 18 世紀のものである。この時代に、近隣のストウのマナーハウスに匹敵するような拡充が行われた。現在はナショナル・トラストにより管理されている（所在地：Aylesbury Vale, Buckinghamshire, England）。

[12] 美術アカデミーにおけるジャンルの階層については、拙著（「絵画と空間－バーン＝ジョーンズの《黄金の階段》とグロヴナー・ギャラリーをめぐって」『人文社会科学論叢』第 28 号, 2019 年, pp.25–45）で論じた。

なる。さらには、それがあのピクチャレスク美学や風景式庭園のモデルともなるのである。ヒル氏の実際の住まいや庭については調査は及んでいないが、前掲のストウの庭は、風景式庭園を確立させたブリッジマン（Charles Bridgeman, 1690–1738）からケント（William Kent, c. 1685–1748）、ブラウン（Lancelot Brown, c. 1715–1783）へと引き継がれ、英国庭園の代表例として今日まで目にすることができる。英国の 18 世紀美学および庭園文化の源泉である要素が、ヒル夫妻の一室もあるのである。

2–3. 服飾と人物の所作

ヒル夫妻の服飾に着目すると、夫は、広い折返しカフスのついたコート（coat）、ウエストコート（waistcoat）、ブリーチーズ（breeches）の 3 点を身に付け、髪型はサイドにいくつかのロールを巻き、後部でテイルを結ぶウィッグ[13]、脚はストッキングをブリーチズに重ね、バックルのついた靴を履く。それと呼応するかのように、ブリーチズ裾に縫い付けたバンド[14]のバックルがあり、その一部が夫の左脚に見える。

夫人は、胴部をステイズ[15]で固定し、薄手のネッカチーフ状の布地が、首と肩を覆っている。この胸襟当ては、夫人のように胴着の中に入れ込む（＝tuck：裾、襟、端等を押し込む）ことが多かったようである。そのためタッカー（tucker）とも呼ばれていた。スカートは横に広がって見えるが、ペティコートを履く前に、パニエ（pannier / hip pad）と呼ばれる腰枠を入れるのが一般的で、さらには張り骨（hoop）を入れ、幅を広げるのがこの時代に好まれた。フォーマルな場では、さらに横に広い扁平な形のものも着用され、幅が限られるドア等では、横向きに歩く必要があったことはよ

[13] 小麦粉等をかけ、白もしくはグレイにした。ヒル氏の襟には、白粉も描かれているように見える。同様の肖像画が、散見される。

[14] ニー・バンド（knee band）と呼ばれ、同時代の資料には刺繍等の装飾が施されたものも多数みられる。

[15] stays：所謂コルセットのような胴着。固くしたリネンの布に、鯨の髭を縫い込んでつくる。前部には飾りに施された逆三角形のパネルであるストマッカー（stomacker）をつける場合もある。

図 12　ペティコート（右）とマンチュア（左），サテン，1760 年代
こうしたギャザーやプリーツ状の襞飾りはフラウンス（flounce）と呼ばれる。出典：A. Ribeiro, *A Portrait of Fashion*, National Portrait Gallery, London, 2015, p.39.

く聞くエピソードである。

その上に「マンチュア」（mantua）と呼ばれる裾の長い前開きのガウンを羽織る。ガウンと言っても、この絵のように胴部は身体のラインに沿った形である。袖は肘までの長さで、カフスにラッフルの飾りをつけている。カフスにはプリーツをつけ、ボリュームとともにマンチュアの胴部の縁飾りと呼応させている。同じような襞装飾が現存例の中に確認できる（図 12）。

スカートの部分には、薄手の布地のエプロンが見られる。これは夫人が茶事や裁縫等の作業をするためではなく、衣類の装飾として当時流行していたものである。恐らく絹織物であろう。刺繍による文様と縁飾りが施されている。

頭部のデイ・キャップは、当時あらゆる層でつけられていたと言われているが[16]、夫人のような繊細なレースのキャップや中央でつまみ上げたよ

[16] リバプール国立博物館（National Museums, Liverpool）は、18 世紀服飾の再現とともに、その着方を解説する動画を作成し公開している。

うな襞（pinch pleats）は、富裕層のそれによく見られるものであった[17]。

夫妻の服装は、18 世紀初頭からのスタイルを踏襲しているが、その時代にみられるような紋織や刺繍等の壮麗な文様表現はなく、それぞれ単色で構成されている。またその淡い色彩も、前述のような古典主義的な趣味を反映しているものと考えられる[18]。簡潔ながらも男性のウエストコートと女性のスカートはサテンの絹織物を思わせるような光沢を持ち、テキスタイルの質の高さを暗示している。ウエストコートやポケット・フラップの縁飾りは、更なる光沢ある表現で描かれている。金糸の縫取が、夫のウエストコートに施されいたものと考えられる。ボタンやボタンホールにも金糸による手の込んだ装飾が見られる[19]。

こうした光沢に対して、それぞれを部分的に覆う、女性のエプロン、男性のコート等のウールやフェルトを思わせる黒や濃紺色のマットな風合いが抑制となりつつも、光沢のある色を引き立ててもいる。その色が、男性のクリームゴールド、女性の青味かかったペイル・ホワイトの柔らかで輝きのある色のコントラストにもなっている。共布であろうか、夫のウエストコートと妻のレティキュールの袋の色彩が、コーディネートされているかのようである。また、袋の引き紐のリボンは、妻の胸部やキャップのリボンと色を合わせ、ペイル・ホワイトのドレスのアクセントとなっている。

端正なデザインの中に、薄手の男性のブラウスや袖先の襞、女性のスカーフやラッフルレースが柔らかさを演出している。これらの縁飾りのスカロップ形もまた、室内のロカイユ装飾等の軽やかな表現と重なり合う特質を有し、ロココの時代の特徴が表れている。

---

[17] A. Ribeiro, *A Portrait of Fashion*, National Portrait Gallery, London, 2015, p.133.

[18] パステル調とも言える淡い色彩は、アダム父子（William,1689−1748; Robert,1728−1792; James, 1732–1794）によって確立されたアダム・スタイル等の建築内装やウエッジウッドのジャスパー・ウエア等の典型ともなっている。

[19] 房やボタンには、パスマントリー（passementerie）と呼ばれる珠飾りの技法が用いられた。こうした細部装飾は、次の図書に詳しい。Hart & S. North, *Historical Fashion in Detail: The 17th and 18th Centuries*, V&A Publiscations,1998.

女性の所作については、「タティング」を通して見てきた通りであるが、男性はどうであろう。夫は、ウエストコートに手を入れ、片方の足に重心をおき、さり気なくこちらを向いたポーズのようにも見える。しかしながら、これは当時の「教本」に基づくものであると言う[20]。その教本フランソワ・ニヴロンの『上品な振る舞いの初歩』（1737 年）[21] は、今日復刻版を手にすることができる。その全頁をあたってみると、肖像画と類似するポーズが見られ（図 13）、その説明には、「両腕は脇が少し開くくらいゆったりさせ[22]（中略）右手をウエストコートの中に入れる。（中略）重心は右足にかけ、左足を前方に出し、その足先を外側に向ける」とある。肖像画のポーズと合致し、夫のポーズはこの時代の「上品な振る舞い」ということになる。

今日の我々には、肖像画と言えば、人物を前にして描くというイメージがあるが、実物を前にした写生というのは近代以降確立してくるスタイルである。デヴィスは、細密画家として長く訓練を受けてきたために、生きたモデルから描くことに不安を感じていたと言われている。そのためスタジオにある小さな木製のマネキン（人体模型）を頼りに、必要に応じてミニチュアの衣装を着せて、描いていたと言う[23]。そうであるとすれば、当時の典型的なポーズをとり入れた可能性は否定できないであろう。「タティング」や「上品な振る舞い」も含めて考えれば、夫妻の絵画上の所作は「定式」がもとになっている可能性は否めない。とはいえ、画家は夫妻を訪問しては取材をしたことであろう。その中で自然にとったポーズや仕草が画家のイメージの中で再構成されている可能性もある。しかし、その「自然

[20] Trumble, ibid.

[21] François Nivelon, *The Rudiments of Genteel Behavior*, 1737.

[22] 左の脇に三角帽（tricorn hat）は、この時代の「最高のおしゃれ」と言われ、鬘が大きくなるについて、脇に抱えられるようになった（『FASHION 服飾大図鑑』河出書房新社 2013, p.151）。「教本」にも「左の脇に入れる」とある。

[23] Trumble, ibid.

図 13　『上品な振る舞いの初歩』掲載図版
“standing”（plate 2）
出典：F. Nivelon, *The Rudiments of Genteel Behavior*, 1737.

な」ポーズでさえも、今日の我々が意識・無意識的にも、カメラの前で瞬時に記号を選んでポーズをとるように、18 世紀の社会的要請に促された所作であると言えるのではないだろうか。

おわりに

本学のこれまでの授業では、美術書掲載図版の《ヒル夫妻》を教材として、18 世紀英国文化を紹介してきた。この度、その実物の所蔵先 YCBA での実見調査で、図版では気づかなかった「糸」が描かれていることが視認できた。それにより、これまで「砂糖挟み」と思われていた夫人の持物が、手芸の道具であると訂正でき、さらに、本学英文学科生の情報により、それが今日でいう「タティング」の道具であることも特定できた。その情報を提供してくれた佐藤美紅さん、そして、2 度にわたる実見の機会を設けてくれたランフィア学芸員、調査に立ち会い、多くの助言をくださったチャ

ン教授には、記して感謝の意を表したい。この謎が解けたことで、本作を通しての 18 世紀英国文化の世界がさらに広がることになり、描かれているモティーフは、その典型とも言える要素であることも再確認できた。

この作品が描かれた英国 18 世紀中葉は、所謂「第一帝国（第一次植民地帝国）」の完成期に向かう時期にあたる。1600 年に東インド会社の設立以降展開した動きは、18 世紀に新大陸、アフリカ、インドに及ぶ植民地支配となって完成する。そして、重商主義政策のもとで資本が蓄えられていく。《ヒル夫妻》の画面上の物品と、こうした歴史とを重ねて読むことができる。また英国内では、17 世紀の政体の変化とともに政党政治・議会政治が形成され、18 世紀には慣行となり、それが今日の基盤となっている。その同時代人でトーリー党の弁護士であったジョージ・ヒル氏の暮らしとしても、本作を見ることができる。「トーリー党」、「法廷弁護士」さらに記録を調べると「判例法の並外れた知識の持ち主」であり、「かなりの学識と業績を持つ数学者であった」ことからは、絵画の中の物品の単なる所有以上の意味も見出せるであろう。

本作の美術史的考察については、稿を改めることにするが、デヴィスの肖像画家としての人物描写に加え、細密画家としての経験が、周囲のモティーフの緻密かつ特徴を捉えた描写を生み出しており、モノを特定することを可能にさせている。「糸」もその一つである。そこからさらに世界が様々に繋がっていくのである。その向こうを奥深く探ることができる入口を、英文化を学ぶ我々に与えてもいるのである。

2023年度
新任教員挨拶

Go Global, MGU!

Timothy John Phelan

I am Timothy Phelan, and I am thrilled to join the English Department at Miyagi Gakuin Women's University. My journey in Japan, spanning nearly four decades, resonates deeply with a term I like to use called nihongojin（Japanese language person）. I use this to express how my engagement with Japan, its people, and its language has significantly shaped my perspective on life, intertwining my American roots with a deep affinity for Japanese culture. I can't imagine being "me" without Japan!

Before joining Miyagi Gakuin, I dedicated fourteen–and–a–half years at Miyagi University, serving in roles including Executive Director of CIEOS（the Center for International Exchange and Overseas Students）and Associate Dean of the Faculty of Foundational Academics. These roles offered me invaluable insights into Japanese higher education's unique challenges and opportunities, particularly in the realm of internationalization.

My tenure at Miyagi University was marked by extensive global engagement, with numerous travels to universities in countries like Vietnam（15 times!）, Australia, South Korea, Finland, the United Kingdom, Holland, and the United States. These experiences honed my passion for guiding students towards becoming global citizens, emphasizing the transformative power of study abroad programs and proficiency in English.

In the English Department, my foremost aim is to nurture students' development from English learners to confident global communicators, recognizing the paramount importance of intercultural understanding and communication skills in today's interconnected world.

Beyond academia, my passion for music, particularly as an amateur jazz trumpet player, enriches my life. With over ten performances at the Jozenji Street Jazz Festival in Sendai with my quartet, I am eager to incorporate this creative energy into my teaching, especially to enhance students' understanding of American culture through English learning.

I am excited to bring my experiences and passions to the vibrant Christian community of Miyagi Gakuin Women's University, contributing to its rich tapestry of cultural and educational excellence.

新任教員挨拶

山口　晋平

2023 年度 4 月より宮城学院女子大学学芸学部英文学科に赴任しました山口晋平と申します。前任の田島先生に代わりましてアメリカ文学系を担当させて頂いております。それまでは九州大学の大学院に所属しておりました。九州生まれ・九州育ちなためにこの度宮城に住むことになり非常に楽しみな反面不安もありました。ただ仙台は非常に暮らしやすく、とても快適なうえにご飯も美味しくて思った以上に楽しませていただいております。東北地方ということで心配していた寒さの方もそこまで厳しいものではなく、不動産の契約書に書いてあった「積雪の際には住民同士で協力して雪かきをすること」という文言に抱いた恐怖は今のところ経験せずに済みそうです（当然その日はいつかはやってくるのでしょうが）。

新しい環境で最も心配すべきことの一つに人間関係がよく挙げられると思いますが、英文学科の先生・副手の方々はこれを読んでいる皆さんがご存じの通り、素晴らしい方たちで（本当にこの言葉に尽きるくらい素晴らしい方たちばかりです）新任の私に対してとても繊細な気配りをしてくださっていることを日々感じております。本当に素敵な職場に出会えたことにとても感謝しております。ただ私自身実務を伴う大学教員経験としては本校が初めてなこともあり、自分の力不足を痛感し皆様のお力になれないこともしばしばで、申し訳なく思うことも少なくありません。少しずつでも英文学科に貢献できる人材になれるよう精進していきたいと思います。

しかしながら、少しずつこちらの生活に慣れつつあるこの頃、そろそろ色々なところを開拓したいという思いも沸きつつあります。美味しいごはん処、観光名所、とりわけ良い温泉に行きたい・・・。どんなところがあるのかネットで調べればすぐ分かることではありますが、生の声に勝る説

得力はありません。私はこちらに人脈を持っていませんのでこれを読んでいる皆さんにぜひご教授願いたいと思います。先日初めて宮城らしい食べ物を食べられるお店を紹介して頂けたのですが、本当に美味しいものがたくさんでびっくりしました。基本インドアではありますが、これは色々試しておかないと損だろうと今色々と盛り上がっているところです。

素敵な職場と素敵な地域に感謝しつつ、今後ともこちらで充実した日々を送っていきたいと思っております。不肖の身ではございますがどうぞこれからよろしくお願い致します。

2023 年度
英文学科生の活動

ESL（English Speaking Lounge）

英語で自分を表現できるようになるために

2 年　遠藤　みゆ

私は将来 English User としてインターナショナルな環境、特に世界各国の人々と関わる機会が多い航空業界で活躍したいと思っています。私は TOEIC などで高得点を取ることも非常に大切であると思いますが、実践的な英会話力や外国人とのコミュニケーション力を高めることが、より一層将来の自分の目指す職業に直結すると考えています。そのため大学生活の中で英語をアウトプットする機会をできるだけ多く増やそうと考えました。英文学科が掲げているように、“English Learner” から “English User” にということを実現するためには、まさにアウトプットの機会が重要だと思います。そこで、ESL という無料でネイティブの先生方と毎日英会話ができる環境が整っているシステムを使わないのは勿体無いと思い、参加し始めました。

Steven 先生と ESL で話す遠藤さん

ESL に参加する上で心掛けたことは、毎週継続して参加することです。最初の頃は英語で好きなトピックについて話していても、テンポの良いコミュニケーションを取ることがあまりできませんでした。ESL への継続的な参加により、リスニングやスピーキングスキルはもちろんのこと、対話の流暢さ、適切な言葉の表現方法などを学ぶことができ、英語でのコミュニケーション能力に自信がついたと実感しています。

また、ESL では自分の好きなトピックについて話すことができるため、例えば、自分の好きなドラマはどのように説明すれば魅力を伝えることができるか、自分のこの英語表現は正しいのか、などのように ESL は自分の好きなことや楽しかったこと、頑張ったこと、わからないことなどを英語で人に話せるようになるための練習の場になるということを感じました。

私は ESL の参加によって自身の英会話力の成長や、学習においてのモチベーションの向上に繋がったので、残りの約 2 年間の大学生活においても ESL に継続して参加し続けたいと思います。

英語を話せるようになるために

4 年　中島かれん

私が ESL に参加しようと思った理由は、英語を使う機会が必要だと思ったからです。英文学科で英語の 4 技能を学習したものの、日常生活では英語を使う機会はほとんどありませんでした。そのため、自身の英語力に自信を持つことができませんでした。そこで、私には英語を話す機会が必要であると考え、ESL を利用し始めました。

利用開始当初は上手に英語を話そうとばかり考えており、難しい単語を使って長く話すことを意識していました。身の丈に合わない高度な方法

だったため、結局話すことができなくて落ち込んでいました。この経験から、私は ESL を利用する際に以下のことを心がけました。

まず、簡単な英語を使うことです。簡単な英語を使うことで相手との会話が継続します。まずは、簡単な英語を使って会話に慣れ、徐々に使う英語のレベルを上げていく方法が私には合っていました。

次に、話す話題をいくつか準備しておくことです。準備をしておくと話題が尽きず、会話の間がなくなります。1 つの話題を長く話すことが難しいので、話題を何個も用意して会話を継続させるようにしました。

最後に、復唱をすることです。相手の話を聞いている時は、相手の話を遮らない程度に復唱することを心がけていました。相手のフレーズを相手が話すスピードで意識して復唱することで、徐々に流暢に話すことができるようになりました。

日本で英語を話せるようになるためには、英語を話す機会を設けて、それを継続させることが必要だと思います。その 1 つの機会が ESL です。私は ESL を利用し、自分に合った学習方法を見つけたことで英会話を楽しく学ぶことができました。

Group ESL で英会話をする中島さん

長期留学報告

カナダでの留学を通して

3 年　川村　理子
ウィニペグ大学（カナダ）
（2023.5.8–2023.8.18）

私は 3 年次の 5 月から 8 月の約 3 か月間、カナダのウィニペグ大学に留学をしました。私は中学生の頃から海外で生活してみたいという思いが強く、大学で留学することを決めていました。実際に英語圏の国で生活することで、英語力を伸ばすだけではなく、これまでとは違った考え方や文化に触れ自分自身の視野を広げることができると考え、留学を決意しました。

私がカナダで生活をする際に常に意識していたことは、そこでしかできないことをするということです。特に現地の人との会話は留学してこそできることだと思ったので、英語を話す機会を見つけることを意識しました。

私が受けていたイングリッシュラーニングプログラムのクラスには思っていたよりも日本人が多く、また、私が留学に行っていた期間は大学のサマーブレイクと被っていたため、現地の大学生はあまり学校におらず、初めは英語を話す機会を見つけることに苦戦しました。しかし、現地の大学生と会話ができるクラブに参加したり、放課後や休日はできるだけ外出し、店員や町で会った人と会話をしたりすることで英語を話す機会を見つけていきました。

また、買い物や旅行に行ったり、映画を観に行ったりと、日常的に英語に触れることで英語に慣れていきました。現地の人と会話をすることで、その地について理解を深め、人々の温かさに触れることができたのは留学に行ったからこそできるものだと思います。

私は今回留学するまでは、海外に行ったことも飛行機に乗ったこともあ

りませんでした。自分自身の英語力もそれほど高くなく、行く前はとても不安でしたが、カナダでの生活は想像以上に楽しく、今ではとても仲の良い友人に出会えた場でもあり、留学に行って良かったと思っています。全てが新しく自分にとって挑戦の多い期間でしたが、大きな自信につながるかけがえのない経験になりました。

Graduation Ceremony にて（本人左）

アメリカ留学での学び

4 年　伊藤　凜
ハワイ大学マノア校（アメリカ）
（2022.10.1–2023.3.25）

私は、2022 年の後期にアメリカのハワイ大学に留学しました。ただ英語を学ぶだけではなく、日常で使われるような生きた英語を身につけたいと思っていたことと、ハワイのよりグローバルな環境の中で、異文化理解を深めたいという理由からハワイ大学への留学を決意しました。

大学では NICE（New Intensive Courses in English）プログラムに所属し、基本的な英語の 4 技能を高めることを目的とした授業を受講しました。Grammar、Listening、Oral production、Integrated skills の 4 科目で、どの授業でもアウトプットに重点が置かれており、実践的なコミュニケーション力が養われました。以前は、英語で自分の意見を言ったり、発表したりすることに抵抗がありました。特に、プレゼンテーションの授業が多く、初めの頃は事前に準備した原稿を読むだけで精一杯でしたが、何度も経験す

卒業式でクラスを代表してスピーチをしたときの様子

るうちに自信がつき、原稿をただ読むのではなく、他の生徒とコミュニケーションをとりながら自分の発表ができるようになりました。半年間の授業を通して、自信の英語に対する苦手克服に繋がったと感じています。さらに、チャレンジ精神も培われました。

留学先は多国籍なだけではなく、生徒の年齢も幅広く、日本ではなかなかそのような環境で授業を受けるという経験はできないので、常に新しい出会いや学びがある日々でした。どんな立場でもチャレンジできること、そしてチャレンジすること自体の大切さを知ることができました。留学前の自分と比較しても、どんなことでもチャレンジしてみようという気持ちが強くなりました。

今回の留学経験を通して、英語力向上だけでなく、内面的な部分も成長することができました。この経験で得た自信を糧に、今後も挑戦することを忘れず、残りの大学生活を実りあるものにすべく勉学に励んでいきます。

韓国留学の経験

4 年　大沼ももか
忠南大学（韓国）
（2022.8.29–2023.1.10）

私は 3 年の後期に韓国の忠南大学へ約 4 ヶ月間の留学に行きました。なぜ韓国へと思った人も多いと思いますが、入学する前から韓国との交換留学制度があることを知っていて、在学中に絶対に留学したいと思っていました。しかし入学した 2020 年はコロナが始まり行動制限がかけられる日々が続きました。何もせずに卒業してしまうのかと考えていた時に留学の案内があり、この機会しかないと思い決断しました。

現地の大学では英語英文学科に所属し English Conversation の授業に参

加しました。全員が韓国人だったので、英語の表現が分からない時も日本語で聞くことができず、韓国語も上手く話せなかったので、最初の頃は授業についていくのが精一杯でした。しかし、同じ授業の仲間や先生たちのたくさんの助けのお陰で中間試験も期末試験も無事に通過することができました。現地の学生は試験のために寝る間も惜しまずに勉強します。一生懸命勉強する姿や活発に授業に参加する姿をみて鼓舞され、はっきり発音や発言ができるまで声に出して練習したり、積極的に授業に参加したりしたことがスピーキングやリスニング力の上達に繋がりました。他には、外国人向けの韓国語の文法を学ぶ授業や、韓国の伝統楽器や音楽を学ぶ授業を受講しました。

休みの日にはテジョンやソウルを散策しました。韓国料理や韓服、チムチルバン（岩盤浴）など韓国文化を存分に体験することができました。また、住んでいた寮が外国人寮であったことから、住んでいる人たちの母国の料理を食べさせてもらうことや一緒に韓国料理を食べに行ったこともありました。ベトナム、インド、メキシコ、マダガスカルなどの様々な国の

600 年の歴史がある景福宮で韓服を着て撮ったもの

人々と話をする中でそれぞれの国の文化を知ることができました。英語が母語ではない国の方々の英語を聞き取り、会話をするのは大変でしたが英語の能力を短期間で伸ばすことができました。

留学は私にとって人生に残る大切なものになり、挑戦する力を持てるようになった濃い自時間、経験となりました。

留学しなければ見えないものがあります

4 年　嶋　幸恵
ウィニペグ大学（カナダ）
（2022.9.6–2022.12.16）

私は昨年 9 月から約 3 か月半カナダのウィニペグ大学（University of Winnipeg）へ留学しました。学んだのはウィニペグ大学付属の語学学校英語プログラム（English Language Program, ELP）です。今回の留学は私にとって初めての海外生活でした。そのため留学へ行く前はコロナ禍ということもあり不安もありましたが、それ以上にやっと留学ができるという嬉しさと期待で胸がいっぱいでした。私は高校生のころから留学をしたいという夢があり、大学を選ぶ際も留学制度を考慮して本学に入学しました。宮城学院女子大学には私が利用した派遣留学という制度があり、留学期間中の宮城学院女子大学の学費が免除されます。この学費免除という制度は、円安や航空費の高騰の中での留学だったので非常に助かりました。また、英文学科からの留学準備に関するサポートは、英文学科に入学して本当によかったと実感させました。

留学することで、自分の思考を根本から変える貴重な経験をたくさん積むことができました。カナダには多くの国籍の人々がいて、家の外に出ると全く知らない様々な言語が聞こえることが日常的にあります。また、宗

教や肌の色も様々です。自分が常識だと思っていたものが他の人には非常識であったり、新鮮なことであったりするということを数多く経験することができました。私が留学してよかったと思う理由に友達があります。ELP には世界中から生徒が集まっているので、日本では知り合えないような人と友人になれます。その国の郷土料理を作って持ってくる人もいて、毎日異文化を体験することができました。世界中の人々と英語という言語一つで会話ができ、心が通じ合うという経験は座学では得られない貴重な経験でした。毎日話すうちに様々な考え方を学び、日本での常識が必ずしも世界中で常識であるとは言えないことを身に染みて感じました。友人たちとはこれからも連絡を取り合い、世界中を旅したいと思っています。

授業では文法、発音・会話、リスニングの 3 種類のクラスがありました。基本的な内容ですが、もちろんすべて英語で行われます。内容が基礎的なだからこそ自分で疑問を持ち、さらに学びを深めることが重要であったと感じています。私が所属する英文学科の英語学コースでは疑問を持ち、それについて考えることの大切さを教わりました。そのおかげで、ELP の授業の中でも理解しきれないところや気になるところなどを家に帰って調べたり、先生やホストマザーに聞いたりして積極的に授業を受けることができました。私のホストファミリーはマザーとバーレーン出身のルームメイトです。よく宿題を教えてもらっていました。その他にも三人で映画を見ながら夕食を食べたり、ボーリングに行ったり、ルームメイトとは週末遊びに行ったりととても濃い時間を過ごしました。ホームステイの生活の中には数えきれないほどの思い出があります。

最後に、留学をしたことで日本を客観視することができるようになりました。様々な文化を知ったからこそ理解できる日本の素晴らしさを認識できようになりました。

この留学を通して、私は自分自身を知ることができ、今まで知らなかったことをたくさん経験することができました。これまでの人生で一番濃い

3 か月半であり、今後の人生でも間違いなく大変濃い思い出として記憶に残るのではないかと思っています。このような機会を与えてくれて理解してくれた両親やサポートしてくださった先生方、留学期間中悩みを聞いてくれた友達にはとても感謝しています。本当にありがとうございました。

　最後に、留学を考えている在学生のみなさま、また高校生のみなさま、是非とも宮城学院女子大学の留学制度を利用して、海外の生活を体験してみて下さい。留学しなければ見えないものがきっとあります。

ホストファミリーとボーリングに行った様子（本人左）

私のハワイ留学

4 年　三浦　早貴
ハワイ大学マノア校（アメリカ）
（2022.10.1–2023.3.25）

私は半年間、ハワイ大学の英語プログラム NICE（New Intensive Courses in English）を受講しました。NICE プログラムでは、Grammar, Listening, Oral Production, Integrated Skills という 4 つのクラスがありました。主に speaking に力を入れており、これらすべての授業でクラスメイトや先生と話す機会が多くありました。1、2 年次に、英文学科の授業で英語の基礎を学んだおかげで、積極的に英語を使い、楽しみながら授業に参加できました。また、現地の学生とディスカッションをする時間もあり、Speaking 力を伸ばすことが出来たと思います。授業は午前のみで、午後は課題をしたり、休日は友達と観光地に行くことで充実した時間を過ごせました。

私が滞在していた期間、ハロウィンや Thanksgiving Day、クリスマスなどの行事があり、沢山の思い出ができました。中でも一番の思い出は、友人とビーチでゴミ拾いのボランティアに参加したことです。私たちがゴミ拾いをした場所には、お菓子のパッケージや衣類などのゴミが捨てられていました。ゴミ拾いが終わり、きれいになったビーチを見て、達成感を感じました。留学中に社会貢献ができたことは、貴重な経験だと思います。

留学するにあたり大変だったことは、渡航までの準備だと思います。授業の登録や滞在先の手配、ビザや航空券の取得など初めての事が多く、良い経験でした。特に学生ビザの申請は、面接も含めすべてが英語だったため、緊張したのを覚えています。しかし、入国した後は、友人や先生方など温かい人々に囲まれ、大きなトラブルもなく、とても楽しく充実した留学生活を送ることが出来ました。私は、シェアハウスに滞在し、ホストファミリーがいなかったため、人がたくさん集まる場所へ行き、なるべく英語

を話す機会を作るようにしました。

ハワイでの半年間、英語のスキルを磨くだけではなく、多くの人と関わることでコミュニケーションを取ることの楽しさ、大切さを体験しました。将来は、留学を経験して培った英語力とコミュニケーション力を仕事で活かしたいと考えています。

留学初日に撮ったダイヤモンドヘッドの写真

カナダ研修報告

カナダでの英語学習

3 年　猪狩　花那

私は、2023 年度夏季に行われた海外研修に参加し、カナダのブリティッシュコロンビア州にあるヴィクトリアに 3 週間滞在しました。

海外研修に参加することを決めた理由は、現在の自分の英語力がどの程度通じるのかを知り、言語が異なる国で様々なことに挑戦する機会が欲しかったためです。また、これからの自分自身の英語学習において、どのような学習方法が必要であるかを知りたいということも理由の一つです。

主なカナダでの生活としては、午前中は学校で文法・リスニング・ライティングの 3 科目の授業を受け、午後には様々なアクティビティに参加しました。アクティビティの後に時間があれば自由行動をし、各ホストファミリーの家に帰宅します。語学学校の校内では英語以外の他言語を話すことが禁止とされており、いつでも英語を話す練習ができる環境が整っていました。授業内では実際にテキストを使いながら、ネイティブの先生方と会話をしながら課題に取り組み、ゲームをしながら楽しく学ぶことができる機会が多くありました。また、先生方が計画してくださっていたアクティビティでは、ビクトリアの自然や街並みを楽しむことができたと同時に、普段知ることのできない歴史や文化について学ぶことができ、現地で経験をすることができて本当に良かったです。

最後になりますが、私はこの 3 週間を通して英語力の向上だけでなく、ネイティブの方と英語で話すことへの躊躇いが無くなったと感じています。海外研修前に抱いていた、文法を間違うことへの恐怖心を克服できたことは、今回得ることができた成長の一つです。自分の英語力に自信が無い私に、ホストマザーが「第一言語が英語ではないのだから、ミスして当

たり前。自分のペースとやり方で英語を勉強していくべき。」と言ってくださったのを覚えています。これからも自分に合った学習の仕方を編み出しながら、目標に向かって英語を勉強していきたいです。

午後のアクティビティでハイキングに行ったときのもの

カナダ留学について

3 年　細川　晃菜

私は、大学生の間に海外留学したいという思いがあったため、夏休みにカナダのヴィクトリアにある Sprott Shaw Language College Victoria に 3 週間留学しました。

私のホストファミリーは看護師をしている女性で、フィリピン出身の方でした。職業柄、夜勤業務があり、ホストマザーと家の中で会話をする時間がほとんどありませんでした。しかし、自分から話をすると目標を立てていたので、会話できる時間を見つけて積極的に話しかけるようにしました。

学校生活では、午前中は Grammar, Listening, Writing の授業を受け、午後からはヴィクトリアの名所を巡りました。教科書を用いて問題を解き、その後近くの生徒とグループワークをして答え合わせをするという授業形態でした。生徒達は真剣に先生の話を聞いて授業に取り組んでいて、周りのことは気にせず積極的に発言していました。先生方も生徒の質問に親身に答えてくださり、発言しやすい雰囲気を作ってくださいました。英語を勉強したいという熱意が感じられる環境の中で学べたことは、とてもいい経験になりました。このような環境で学んだことで、自分が疑問に思ったことやわからないことは決して恥ずかしいことではないと気づき、自分の疑問点や意見を伝える力が身についたと思います。

留学中に楽しかったことは、午後のアクティビティでサップをしたことです。膝立ちでボードに乗ることから始まり、慣れてきたら立ち上がり、パドルというオールを使って海面上を進みます。自分が行きたい方向に進むことは難しいことでしたが、トレーナーの方に優しく教えていただいたおかげで、安定して漕ぐことが出来ました。幸運なことに野生のアザラシと遭遇し、とても嬉しかったのが一番の思い出です。

この留学経験で自分の意見や思いを伝えることの大切さを学びました。様々な国籍や背景、性別、宗教を持った方たちと交流したことで、自分の中で当たり前だと思っていたことが実は当たり前ではないことに気付き、これを将来に活かしていきたいと考えています。

ハラハラドキドキのサップ体験

アフターコロナ、人生初の海外留学

4 年　芳賀友仁香

幼い頃から洋楽や海外ドラマが生活の一部だった私は、できれば大学生のうちに海外に行きたい、と海外留学に思いを馳せていました。しかし、大学入学と同時にコロナの脅威にさらされ、海外留学は夢のまた夢の存在となり、潔くあきらめようと思っていたところ、大学生活最後となる今年、最後のチャンスが回ってきました。

午前中は語学学校での授業、午後はアクティビティーと、非常に盛りだくさんな内容でした。毎日 6 時に起床しなければならなかったのですが、

思えば早起きが一番大変なことだったと思います。留学中一番嬉しかったことは、自分の誕生日をホストマザーを始め、語学学校の皆さんがお祝いしてくれたことです。今まで誕生日が夏休みと被ることが大半で、大勢からお祝いされた経験がなかったため、心の底から嬉しかったです。海外での誕生日は、とても貴重な経験になりました。

授業はオールイングリッシュの環境下で、先生や他国出身の生徒とコミュニケーションを密にとりながら学びました。ホームステイ先でも、英語を聞き取って理解に励み、英語で会話をしなければいけません。リスニングには自信がありましたが、最初はほとんどわからず、ニュアンスで相槌を打ったり、笑顔で誤魔化すことしかできませんでした。しかし、だん

誕生日にホストマザーとパーティーをした時の様子

だんネイティブのスピード感に慣れていき、相手に伝わった時の嬉しさも相まって、どんどん自分から英語で話せるようになりました。3 週目が終わる頃には、もう少し滞在できたらスキルアップできそうなのに、と後ろ髪を引かれる思いだったほどです。

日本には英語を話せる人がたくさんいますが、私にとっては「海外に行った」という経験自体が心強いものとなり、積極的に英語をアウトプットできるようになったと思います。就職先はホスピタリティ業界、これからは今まで以上に英語を使うことになります。この海外留学の経験を糧に、世界中の人々に笑顔を届ける存在になりたいです。

British Hills インターンシップ報告

お客様と接するということ

3 年　森　葉月

11 月 28 日～ 12 月 3 日の 6 日間、ブリティッシュヒルズでのインターンシップに参加してきました。初日はブリティッシュヒルズのコンセプトや利用する学生の実態、全体のスケジュールなどを聞き、その後の活動でどう動けば良いかを確認しました。

2 日目からは実際の業務に参加しました。業務内容はビュッフェのための料理や食器類の準備、配膳、コース料理の提供、テーブルセッティング、片付けなどでした。また、業務を行なっている最中のゲストの対応も仕事の 1 つです。初めは仕事内容を覚えるのに必死でなかなかゲストとコミュニケーションを取ることができませんでしたが、慣れてくると余裕を持って行動でき、たくさんのゲストと挨拶や接客を通して関わることができました。

今回のインターンシップで印象に残ったことは、スタッフの方が「自分たちにとってはいつものルーティーンをこなしているだけだけど、お客様にとっては初めての場であることを意識している」と言っていたことです。ゲストのホテルに対する印象は、その日のスタッフのパフォーマンスたった 1 回で決まってしまいます。それを成功させ、ゲストに満足してもらうためには、毎回のパフォーマンスでゲストをよく観察し、何が求められているのか、どのようにサービスを提供するかを考えることが大切だと感じ、お客様に接するということはどういうことなのかを学ぶことができました。これはホテル業界だけに言えることではないので、自分の将来の職でも活かしたいと思います。

実際にお客様にコース料理の提供をしている様子（本人中央）

2023 年度
英文学科活動報告

2023 年教員研究・教育活動報告

吉村典子

研究活動

イェール大学の招聘研究（Visiting Scholar Awards）の機会を得て、北米最大の英国美術コレクションを有する同大学の英国美術研究所に属し、調査・研究・講演等を行った。戦後美術研究を中心としたが、本学科文化系の授業で扱う 16 世紀～ 19 世紀の美術資料（教材研究）においても貴重な機会となった。

学術論文

吉村典子 「リチャード・ハミルトンの《いったい何が、今日の家庭をこれほどにも変え、魅力的なものにしているのか？》のもう一つの意義」『デザイン理論』意匠学会誌、2023 年 1 月

教材研究ノート

吉村典子 「18 世紀英国文化謎解きの旅 ―肖像画《ヒル夫妻》をめぐって」『英文学会誌』第 52 号、宮城学院女子大学学芸学部英文学科、2024 年 3 月

口頭発表

吉村典子 「リチャード・ハミルトンの《The Critic Laughs》 ―1968 年のプリントと 1971-2 年のマルティプルをめぐって」美学会全国大会、慶應義塾大学、2023 年 10 月

招聘講演会

Noriko Yoshimura, “*This is Tomorrow* and After: Art Project by Richard Hamilton, John McHale, and John Voelcker,” Yale Center for British Art, USA, August, 2023.

研究費等の受領

DNP 文化振興財団グラフィック文化に関する学術研究助成「リチャード・ハミルトンのインクジェットデジタルプリントの考察」

Visiting Scholar Awards, the Yale Center for British Art, USA.

社会活動

意匠学会国際交流委員
意匠学会『デザイン理論』投稿論文・査読
ACDHT: Asian Conference of Design History and Theory 査読委員
第 8 回ウィリアムモリス研究会運営・司会（12 月 16 日）

教育活動

本誌巻末の「講義題目」の科目を担当した。このほかには、留学推進をはかり、英語研修施設を英国を中心に視察した。その結果、英国の 7 校が、本学科のパートナー校となった。夏休みにはこのうち 3 校で、3 名の学生が短期留学を実施した。次年度は授業の一環としての海外研修をロンドン校を利用して行う予定である（20 名の学生が参加予定）。

国内では、英語研修施設を利用してのインターンシップを計画し、4 名の学生（4 年生 1 名、3 年生 1 名、2 年生 2 名）を派遣した（詳細は本誌 p. 68–69 を参照）。有意義なインターンシップとなったため、将来的には正課に組み込んでいくことを計画したい。

遊佐典昭

研究活動

本年度は研究課題「遠隔授業は、英文法知識の獲得・定着にどのような影響を与えるのか？」の一環として、遠隔授業に用いられる AI に関する情報収集と、言語理論の進展について研究を行った。また、研究成果の社会還元として東京言語研究所主催の「教師のためのことばセミナー」で「理論言語学は外国語教育の役に立つのか？」と題して講演を行った。また、11 月 30 日に大津由紀雄氏（慶応大学名誉教授・関西大学・中京大学客員教授）の公開講演会を英文学科と共催で実施した。もう一つの研究課題「OS 言語からみた「言語の語順」と「思考の順序」に関するフィールド認知脳科学的研究」では、共同研究者がトンガでの言語獲得実験を行ったので、その検討会に参加した。研究論文は 2 編が出版され、1 編が掲載予定となった。

論文

1. Noriaki Yusa, Cornelia D. Lupsa, Naoki Kimura, Kensuke Emura, Jungho Kim, Kuniya Nasukawa, Masatoshi Koizumi, and Hiroko Hagiwara（2023）“Effects of Annual Quantity of Second Language Input on Pronunciation in EFL Environments,” *Issues in Japanese Psycholinguistics from Comparative Perspectives Volume 1: Cross-Linguistic Studies*（pp. 193-209）. de Gruyter.
2. Koichi Otaki, Manami Sato, Hajime Ono, Koji Sugisaki, Noriaki Yusa, Yuko Otsuka, and Masatoshi Koizumi（2023）“Case and Word Order in Children's Comprehension of Wh-questions: A Cross-Linguistic Study,” *Issues in Japanese Psycholinguistics from Comparative Perspectives Volume 1: Cross-Linguistic Studies*（pp. 147-174）. de Gruyter.
3. Yoichi Miyamoto, Koichi Otaki, Chie Nakamura, and Noriaki Yusa（to appear）"On the Nature of Operators in the Grammar of L1 Chinese Learners of L2 Japanese," Elena Babatsouli（ed.）*Multilingual Acquisition and Learning: An Ecosystemic View to Diversity*, John Benjamins.

研究発表・公開講演

1. 「理論言語学は外国語教育の役に立つのか？」（2023 年 10 月 29 日、東京言語学研究所主催「教師のためのことばセミナー」にて）
2. “On the nature of operators in the grammar of L1 Chinese learners of L2Japanese”（2023 年 12 月 17 日、宮本 陽一 , 大滝 宏一 , 中村 智栄 , 遊佐典昭、大阪大学、「言語科学講演会・研究拠点形成事業 12 月期ワークショップ」）

社会活動

1. 日本第二習得学会顧問
2. 海外ジャーナル査読委員（匿名）
3. 海外学会査読委員（匿名）

科学研究費の受領

1. 「遠隔授業は、英文法知識の獲得・定着にどのような影響を与えるのか？」（科研費：挑戦的研究：代表）
2. 「OS 言語からみた「言語の語順」と「思考の順序」に関するフィールド認知脳科学的研究」（基盤研究（S）、分担）

教育活動

例年通り英文学科の『ことばと人間』『英語音声学』『Academic Reading』『英語学基礎セミナー』『生成文法』『卒業論文セミナー』を担当した。全ての科目において、「ことばの気づき」に力点をおき、受講生が自分で問いを発し、その問いを言語化することができるように意識しながら、講義・セミナーを行った。講義・セミナー科目では、グループワークは学生がお互いの多様性を知る上で役立ったという感想が多かった。『英語音声学』では、受講生が毎回、受講生の前で課題を発音し英語発音の基本的な型を身につける訓練を行った。受講生は 4 月と比べると 1 年間で大きな進歩が見られ、受講生も自分の変化が実感できたと思われる。

集中講義

1. 沖縄国際大学総合文化学部英米言語文化学科「言語研究特論」（2023 年 8 月 14 日～ 18 日）
2. 中京大学国際学部言語文化学科「言語学特殊講義」（2024 年 2 月 3 日～ 8 日）

増冨和浩

研究活動

これは多くの大学の教員が置かれている状況と同様と思われるが、教育・研究以外の大学・学科運営に関わる業務にかなりの時間を奪われる状況が続いており、研究活動を行うことが制限されていることは誠に残念なことだと感じている。

学科内業務としては、今年度は教務センター委員を担当し、英文学科のカリキュラム全体の運営および管理、非常勤の先生方との連携および情報共有、来年度（2024 年度）の時間割の作成などに多くの時間と労力を費やすことになった。また、大学全体の運営に関わる委員会業務等を仰せつかる機会もますます増えており、研究活動に注力できる環境はさらに無くなったことを痛感する一年であった。

そんな中にあっても、国内外の研究者の研究成果に接することは、今後の研究テーマの検討に関して大きな刺激になっている。これまで研究の中心としてきた英語名詞句の統語的・意味的特性の解明に関しても興味深い

研究成果が発表されており、それらの知見を取り入れ、生成文法の視点に加え認知言語学における意味拡張についての視点などを取り入れることで、特に定冠詞・不定冠詞の意味特性や統語的な機能の解明に関して、新たな展開を探ることができるのではないかとの発想を得ることができた。

来年度以降も教育・研究とそれ以外の業務のバランスに大きな変化はない（あるいはさらに厳しくなるかもしれない）と考えられるが、定年退職までの時間を見据えつつ、一定の区切りを示せるような研究活動を行っていきたいと考えている。

論文

本年度の研究活動は上記のような状況であったため、具体的な論文等を示すことができず残念ではあるが、数本の論文を執筆中であるので、2024 年度には学会誌および本学の研究紀要等で順次公表していく予定である。

社会活動

昨年度から引き続き、日本英語英文学会と日本英語学会の評議員を務めており、総会および役員会を通じて当該学会の運営に携わった。また、本年度も、オープンキャンパス等を利用し、高校生に対して進学することの意義や大学で学ぶことの魅力を伝える活動を行った。

教育活動

コロナ禍も落ち着き、対面授業が基本となっているが、すべての担当授業で支障なく授業運営を行うことができた。3、4 年生対象の「英語学基礎セミナーⅠ・Ⅱ」、「卒業研究セミナーⅠ・Ⅱ」等のゼミ科目では、コロナ禍で習得した Zoom やマイクロソフト Teams 等の遠隔支援ツールのメリットも活用しながら、英文レポートや卒業論文の添削指導などを効果的に行うことができた。また、教職免許の取得を目指す学生が再び増えてきたことを踏まえて、1、2 年生の Grammar の授業では、「英文法の知識を教育現場でどう生かすか」ということを意識させながら授業を展開し、学生の学習意欲を喚起することができた。

清水菜穂

研究活動

昨年度から引き続きアメリカ黒人演劇を中心に研究を進めてきたが、残念ながらまとまった成果を論文として発表できなかった。そうした中で、新たな黒人劇作家の作品と多く出会うことができ、これまでの「黒人演劇とギリシャ悲劇との関連」だけではなく、研究テーマをさらに広げられたことは一つの成果だと言える。今後さらに研鑽を積んで納得のゆく結果を出せればと考えている。

書評

「延ばしに延ばされた夢はどうなる？―北斗七星を追った先に果たして『自由』はあるのか？」(ロレイン・ハンズベリ著　鵜殿えりか訳『ひなたの干しぶどう／北斗七星』小鳥遊書房、2023 年）『図書新聞』3627 号。2024 年 2 月 17 日。

「エディ・S・グロード・ジュニア著（秋元由紀訳）『ジェイムズ・ボールドウィンのアメリカ』」『黒人研究』第 93 号。2024 年 3 月 31 日。

社会活動

多民族研究学会（MESA）大会運営委員長

教育活動

3 年次の「英米文学・文化基礎セミナーⅠ・Ⅱ」の 14 名および 4 年次の「卒業研究セミナーⅠ・Ⅱ」の 15 名に対する指導において、今年度特に力を入れたのは、参考資料の収集に図書館をできるだけ利用することである。宮城学院の図書館が所蔵する英語関係の膨大な蔵書を各自の研究に生かしてもらうことを、今年度の目標にかかげた。その結果、例年に比べかなり図書館利用度が増し、実に多様なテーマの論文･レポートとなった。受講者が研究に悩みながらも真摯に取り組んでいる様子を目の当たりにし、指導する立場の喜びと難しさの両方を感じた 1 年だった。

在籍者数全体が減少しているためか、「アメリカ文学史Ⅰ・Ⅱ」、「アメリカ文化史 1・2」、「英米文学講読（小説・批評）1・2」とも昨年度に比べて受講者はやや少なくなったが、少人数ならではのディスカッション形式を取り入れやすく、教材内容に対する受講者の理解・考察を深められた

と感じている。

大学院での「英米文学特殊講義Ⅰ・Ⅱ（小説）」および「英米文化論特殊講義Ⅰ・Ⅱ（文化論）」では、院生各自の関心に沿った内容を取り入れたためか、研究意欲が高く、難解な読解や活発なディスカッションが行われた。またそれぞれの期末レポートも大学院に相応しい高レベルの内容が提出された。

Timothy John Phelan

研究活動

As this was my first year at MGU, I spent much of the year focused on teaching（see below）. The research activities I did conduct are listed below. Of note, are two presentations given at JACET meetings. The first was related to the relaxation of government rules related to mask usage and how this was interpreted by students. Of interest to me is that seven months later, it is still the case that a strong majority of students continue to wear masks in the classroom. This trend is concerning. One wonders what event will have to occur for students to stop wearing masks. The continued usage – for whatever reason – seems to indicate that students are not aware of or not concerned with the impact mask usage has on interpersonal communication effectiveness.

口頭発表

Timothy Phelan, “To wear or not to wear? Mask usage in EFL classes,” 大学英語教育学会 東北支部 , 支部大会 . TKP ガーデンシティ PREMIUM 仙台西口 , June 2023.

Timothy J. Phelan「ウェルビーイングの定義を考える」日本語教育未来学会新シンポジウム「多文化共存における well-being を求めて」オンラインにて , 2023 年 8 月 .

Timothy Phelan, “Educating the student gaze by guiding cultural discovery: Reflections from study trips to Vietnam,” JALT Sendai Monthly Meeting. Aoba-ku Chuo Shimin Center, October 2023.

Timothy Phelan, “EFL writing instruction for Japanese college students in the age of ChatGPT and DeepL: Problems and possibilities,” 大学英語教育学会 東北支

部 , 支部例会 . TKP ガーデンシティ PREMIUM 仙台西口 , November 2023.

社会活動

8 月の理事会で大学英語教育学会（JACET）の東北支部長に就任。

教育活動

宮城学院女子大学国際交流委員会 委員
宮城学院女子大学キリスト教文化研究所 所員

Though my classes at my previous employer were often large, sometimes with over 100 students, my classes at MGU have uniformly been small. In this sense, this year has been a time of adjustment and transition since teaching methods appropriate for a large group are different from those appropriate for a small group. In addition, it has been a refreshing experience to teach/coach students "majoring in English" since their motivation and desire to improve is strong. In addition to my teaching responsibilities, I have also enjoyed working on the International Exchange Committee（and look forward to having a larger impact in this area in the future）, attending chapel services, helping with the study trip to British Hills, and participating as an orchestra member for the school's annual Christmas concert.

酒井祐輔

研究活動

7 月には東北ロマン主義文学・文化研究会において都市とコミュニティに関連したテーマで研究発表を行う機会をいただいた。発表成果に関しては早急な論文化を目指したい。8 月から 9 月にかけては海外研修の引率としてカナダ、ヴィクトリア州の州都ヴィクトリアに 3 週間滞在したが、この間には、クライスト・チャーチ大聖堂をはじめとする現地の教会を見学することができた他、ローカルな文芸誌・雑誌の収集を行った。10 月の大阪大学･東北大学　合同研究会（於大阪大学）では発表司会を務めた他、11 月に日本ヴァージニア・ウルフ協会第 43 回全国大会（於東京大学）、12 月に日本英文学会東北支部大会第 78 会大会（於東北学院大学）に参加し、質疑応答等を通じて有意義な意見交換を行うことができた。また学会活動

を通じて、全国の様々な分野の研究者とも交流することができた。学術誌への論文掲載の無かった点が悔やまれるが、総じて充実した研究活動を送ることのできた 1 年であったと考えている。また、これまでの研究成果を博士論文としてまとめ、東北大学に提出した。

学位論文

“Virginia Woolf: Society, Community, and the Novel.”（博士論文）、東北大学大学院文学研究科、2024 年 3 月。

論文等

スケジュール上の都合もあり、今年度の学術誌等での成果発表は実現しなかったものの、現在複数の原稿を準備中である。2024 年度以降の成果として報告できるよう努めたい。

研究発表

「*Jacob's Room* の反転的読解——個人の心理から都市の人々へ——」第 19 回東北ロマン主義文学・文化研究会日本（於東北大学）、2023 年 7 月。

社会活動

1. 日本英文学会　大会準備担当書記
2. 日本英文学会東北支部　大会準備委員
3. 東北ロマン主義文学・文化研究会　会計
4. 日本ヴァージニア・ウルフ協会　出版企画ワーキンググループ委員

教育活動

英文学科内では 4 年生対象の「卒業研究セミナー」、3 年生対象の「英米文学・文化基礎セミナー」および「Academic Reading」においては学生の関心を既存の学問的なテーマ設定に落とし込むことに拘泥するではなく、学生独自の着眼点を活かして議論を発展させることができるような助言・指導を行うよう心掛けた。2・3 年生対象の、「英米文学の世界（15–18 世紀）」および全学教育の「リベラルアーツ基礎」ではシェイクスピアの演劇を題材とし、授業に LTD 学習法やリテラチャー・サークル学習法を参考としたグループディスカッションを取り入れた。教員の経験不足もあり、特に前期から後期の最初数週間にかけては試行錯誤を繰り返すこととなったが、次第に本学の気風に合った授業法を確立しつつあると感じている。

近年の文学分野の研究・教育を巡る動向について関して概括的なことを述べれば、異文化について学ぶことの重要性は相変わらず広く認識されている一方で、その学びの過程において文学作品を経由することの自明性は失われつつあるように思われる。文学作品を学ぶことの価値について改めて明示的に語ることが求められているのかもしれない（例えば、文学作品には歴史的・社会的事実が「反映」されるだけではなく、文学作品を書き、または批評するという営みが、歴史的・社会的事実への応答・介入でもありえるのだ、というような）。

1・2 年生対象の「Intensive Reading」では、文の構造を意識して読むこと、日本語に訳す際も後ろから訳すのではなく、なるべく英語の語順に沿って訳すよう指導することに力点を置いた。また、前回の授業内容の復習となるように小テストを作成し、履修者に授業ノートの復習を促した。8 月から 9 月にかけてはグリーン先生と共同で海外研修の引率を担当した。

山口晋平

研究活動

今年度は宮城学院女子大学付属人文社会科学研究所新所員研究会にてこれまでの研究の概略をまとめたものを口頭発表した。ナサニエル・ホーソーンの 4 つの長編作品における身体表象に注目し社会規範から逸脱する身体に関して言及した。

口頭発表

山口晋平「ホーソーンの 4 つの長編作品における歪な身体表象―共同体の規範とイデオロギーからの逸脱」2023 年度第一回宮城学院女子大学付属人文社会科学研究所新所員研究会（於：宮城学院女子大学）、2023 年 7 月

社会活動

・日本ナサニエル・ホーソーン協会役員

教育活動

今年度の「英米文学・文化基礎セミナー」では 19-20 世紀の主要なアメリカ文学作家（Nathaniel Hawthorne、Edgar Allan Poe、Kate Chopin、Stephen

Crane、J. D. Salinger など）によって執筆された短編作品を扱った。原文を扱い英語の文章を通して物語を解釈することで単語一つ一つの大切さを知ってもらい、さらに当時の文化背景などを説明して学生同士で意見交換をしてもらった。作品を色々な視点から読むことの楽しさにも触れながら時代ごとに作風も異なる様々な作品に触れてもらい多様なアメリカ文学の面白さを伝えられるように努めた。

「英米文学の世界（19-20 世紀）」の授業ではヘミングウェイの短編作品を取り上げて作品に描かれたもの以上のことを読み取ることの大切さを伝えることを意識した。授業の終わりでは毎回レスポンスペーパーに感想や自分の意見を書いてもらい翌週の授業の冒頭でリアクションを行うようにした。授業で解説したこと以上に様々な疑問を抱いて記入してくれる学生もおり、ヘミングウェイのハードボイルドで「氷山の一角」と呼ばれる世界を楽しんでくれていたようである。

Jennifer Green

研究活動

I have spent this year attending and participating in several academic conferences, collecting data for upcoming research projects, and writing one paper aimed at teachers. This year again I helped to coordinate and prepare the Tohoku ELT Expo, where many teaching professionals came together to share their ideas, research, and resources. It was another successful year with high attendance. I also became a member of JACET this year and plan to continue my ties with the group in the upcoming school year. As for active research, I collected data related to use of and attitudes on masks in connection to the overseas training held during the summer vacation. I have also been working with Prof. Fujisaki from the Department of Education to implement critical thinking activities into writing classes to see if the activities increase students' critical thinking skills and critical writing skills. Finally, I wrote one short piece for the My Share portion of The Language Teacher journal explaining a class activity that can be used to reduce foreign language anxiety.

口頭発表

Green, J.（2023, January 29）. *Ideas on short-term study abroad* [Conference presentation]. JALT Sendai, Sendai, Miyagi, Japan.

Green, J.（2023, May 28）. *The dreaded silence and ways to avoid it* [Conference presentation]. JALT Sendai, Sendai, Miyagi, Japan.

Green, J.（2023, October 1）. *A reflection on short-term study abroad to Victoria, Canada* [Conference presentation]. JALT Sendai: Study Abroad - Stories from the Field, Sendai, Miyagi, Japan.

Green, J.（2023, December 10）. *Japanese vs English profanity: Comparing the differences between the two languages and examining the resulting effects of those differences* [Conference presentation]. Tohoku ELT Expo 2023, Sendai, Miyagi, Japan.

教育発表

Green, J.（2024）. Let's dance! Get embarrassed and laugh together. *The Language Teacher 48*（1）. Advanced online publication.

教育活動

This year was the first year to resume the overseas training program since the pandemic. I accompanied 30 students to Victoria, BC, Canada for three weeks in August along with Prof. Sakai from the department. Before the trip, I taught a preparation course where students learned essential knowledge about traveling overseas and about our destination, and where the students presented information that they had prepared for the trip to their classmates. In Victoria, students stayed with host families, studied at Sprott Shaw Language College, and went on afternoon activities to explore the area and experience the culture. On the way back, one of our flights was unexpectedly cancelled by the airline at the last minute. But with quick thinking, we were able to travel by ferry instead and return to Japan on time. Overall, the trip was a success with the students having a wonderful time experiencing life in Canada while honing their English skills.

This year I have been in charge of coordinating the English Speaking Lounge（ESL）. I worked with two fourth-year students from the department to hold the first group ESL sessions run by students. The student teachers have had regulars attending their sessions and have gained valuable experience leading speaking activities. In addition, the student teachers devised and implemented a stamp rally

for ESL with my support that was very popular with students, leading to increased use of ESL. While this was the first year having student teachers in ESL, things went smoothly, and it is planned to continue in the next academic year with two other students that will be in their fourth year. I am confident that group ESL with student teachers will continue to be a mainstay in forthcoming years.

2023 年度開講　英文学科講義題目

英文学科専任教員

吉村典子

Academic Reading
イギリスの生活と文化
イギリス文化史
英米文学・文化基礎セミナー
卒業研究セミナー

遊佐典昭

Academic Reading
ことばと人間
英語音声学
生成文法（2 年生）
英語学基礎セミナー
卒業研究セミナー

増冨和浩

Grammar（1 年生）
Grammar（2 年生）
生成文法（3 年生）
英語学基礎セミナー
卒業研究セミナー

清水菜穂

Academic Reading
英米文学講読（小説・批評）
アメリカ文化史
アメリカ文学史
英米文学・文化基礎セミナー
卒業研究セミナー

Timothy John Phelan

Speaking（1 年生）
Writing（1 年生）
Listening & Vocabulary（2 年生）
Academic Writing & Presentation
英語教育（TESOL）
卒業研究セミナー

酒井祐輔

Intensive Reading（1 年生）
Intensive Reading（2 年生）
Academic Reading
英米文学の世界（15-18 世紀）
英米文学・文化基礎セミナー
卒業研究セミナー

山口晋平

Intensive Reading（2 年生）
Academic Reading
英米文学の世界（19-21 世紀）
英米文学・文化研究セミナー
英米文学・文化基礎セミナー
卒業研究セミナー

Jennifer Green

Writing（2 年生）
Reading Activity（1 年生）
Reading Activity（2 年生）
Listening & Vocabulary（2 年生）
Academic Writing & Presentation
Overseas Study Preparation
Overseas Study
アメリカの生活と文化

非常勤教員

有光秀行
英米文学・文化研究セミナー

飯味千秋
英米文学講読（詩・演劇）

植松靖夫
イギリス文学史
英米文学・文化研究セミナー

金子義明
Grammar（2 年生）
英語学研究セミナー

菅野幸子
文化交流論
英米文学・文化研究セミナー

木村春美
英語学研究セミナー
英米文学・文化研究セミナー

木山幸子
心理言語学
語用論

熊谷優克
英米文学・文化研究セミナー

小泉政利
日英語対照研究
心理言語学
英語学研究セミナー

越川芳明
英米マスメディア論

島　越郎
Grammar（1 年生）
Grammar（2 年生）

鈴木　渉
英語科教育法（2 年生）

髙橋久子
Intensive Reading（1 年生）

野村忠央
英語の歴史

那須川訓也
社会言語学

福地和則
英語教材研究
英語科教育法（3 年生）

星かおり
Intensive Reading（1 年生）

熊　可欣
外国語としての日本語

Barry Kavanagh
Speaking（1 年生）
Speaking（2 年生）

Darren Kinsman
Speaking（2 年生）
Writing（2 年生）

Daniel J. Eichhorst
Academic Writing & Presentation
Discussion Seminar

Emily MacFarlane
Writing（1 年生）

Jerry Miller
Speaking（1 年生）

John Wiltshier
Speaking（2 年生）
Reading Activity（1 年生）
Reading Activity（2 年生）
Listening & Vocabulary（1 年生）
Academic Writing & Presentation
イギリスの生活と文化

Lee Salmon
Writing（1 年生）
Academic Writing & Presentation

Tomomi O'Flaherty
Writing（2 年生）

2023 年度　英語英米文学専攻講義題目

指導教員

清水菜穂
英米文化論特殊講義（文化論）
英米文学特殊講義（小説）

吉村典子
英米文化論特殊講義（文化史）

Timothy John Phelan
文化交流論演習

非常勤教員

John Wiltshier
英語コミュニケーション

2023 年度　卒業論文題目

❄ 遊佐ゼミ（英語学）

嶋　　幸恵 ・・・・・・N'-Ellipsis in Korean and Japanese

谷口　美空 ・・・・・・Unpronounced Arguments in English and Japanese

❄ 増冨ゼミ（英語学）

佐久間　妃 ・・・・・・英語学習における動機づけの役割とその効果を用いた指導方法に関する研究

杉山紗枝子 ・・・・・・日本の英語教育における発音指導について

❄Phelan ゼミ（英語学）

紺野　稚葉 ・・・・・・日本の中学校英語の授業において生徒たちの興味を保ち続ける方法

家住　笹良 ・・・・・・副読本の効果他国との英語学習の比較

遠藤　乃綾 ・・・・・・ディズニー映画を使用した英語教育 ―「COCO」を英語教材にすることの可能性を考える―

吉田明日香 ・・・・・・学習指導要領が提示する英語教育に対しての内発的・外発的動機づけの分析と中学・高校生の意識や動機づけのギャップ調査 ―学校英語教育の目標と学習方針の改善案の提示―

❄ 吉村ゼミ（英米文学・文化）

先﨑さおり ・・・・・・The Relationships between Tea Rooms and Cakes in Britain

和島　百燿 ・・・・・・Tracking Growth and Change in the World of Badminton

安部　優花 ・・・・・・古今の魔女の違い ―中世と現代の比較を通して―

伊藤　　凜 ・・・・・・女性と身体 ―シルエットを作り出すコルセット―

吉川　詩乃・・・・・・パブがイギリス文化として残った理由
小林　楓果・・・・・・エリザベス 1 世の肖像画 ―《Rainbow Portrait》を通して―
榊原　遥南・・・・・・遺跡から読み解く古代イギリスの石の文化
佐々木彩乃・・・・・・使用人文化からみる英国の表側と裏側
佐藤　愛子・・・・・・荒木飛呂彦の英国世界 ―『ジョジョの奇妙な冒険』を通して―
佐藤　明香・・・・・・英国の式典における音楽の存在意義 ―チャールズ 3 世の戴冠式を通して―
清水　美里・・・・・・Modern Coronations Based on Traditions in the UK
菅原莉莉杏・・・・・・イギリス喫茶文化の成立と展開
曽根沙也花・・・・・・イングランドとバラ ―その関係性と特質―
大久　美咲・・・・・・ガートルード・ジーキルの色彩計画から読み解く英国庭園と家
伏谷　茉美・・・・・・Queen は本当にロックバンドなのか
渡邉　　遥・・・・・・ヴィクトリア時代イギリスの豊かな生活 ―インテリア・デザインから見る暮らしの変化―

❀ 清水ゼミ（英米文学・文化）

秋保　奈映・・・・・・The “New Women” at the Turn of the Century in America
池田　樹音・・・・・・Commercialized Christmas in the United States
遠藤　栞渚・・・・・・The Transition of Representation of Blacks in Disney Movies
遠藤　千翔・・・・・・アメリカのスポーツ文化 ―競技の歴史やルールに表れるアメリカ的特徴―
小野　千織・・・・・・History and Culture of American Architecture
齋藤　　紗・・・・・・アメリカ合衆国のメディアにおける日本人表象
酒井　春奈・・・・・・Drugs in the American Society: History, Purpose, and Influ-

ence

中島かれん ・・・・・・The Analysis of Popularity of Marilyn Monroe

芳賀友仁香 ・・・・・・Madonna Opens New Freedom

堀　　杏映 ・・・・・・American Counterculture in the 1960s and 1970s: Social Conditions Hidden in the Hippie Culture

真山　優香 ・・・・・・Educational Disparities in Elementary and Secondary Education in Public Schools in the United States

三浦ひより ・・・・・・The Backlash of the Second-Wave Feminism in the United States

簗場　ゆい ・・・・・・ＬＧＢＴＱをめぐる課題―日米の LGBTQ 問題を考える―

山田　彩佳 ・・・・・・American Food Culture: Native American Food, Southern US Food and Fast Food

渡邉　純菜 ・・・・・・Analysis of Gay and Lesbian Cinema: Transition and Diversity

❄ 酒井ゼミ（英米文学・文化）

新井　千尋 ・・・・・・現代からみる中世ヨーロッパの結婚――ウィリアム・シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』におけるキャピュレット家をめぐって

石田　夢歌 ・・・・・・『サイラス・マーナ―』における暴かれる過去――シンデレラストーリーの変奏

遠藤　実桜 ・・・・・・バーネットにおける女性の理想像とは――『小公女』における登場人物から見る

加藤　小桃 ・・・・・・価値観の相違がもたらす人間関係への影響――『ジェイン・エア』におけるジェンダー観と階級意識

小林　優奈 ・・・・・・『分別と多感』に見る理性と感情の対立――幸せの条件

今野　里穂 ・・・・・・『ノーサンガー・アビー』における結婚の条件――地

位・財産・容姿・性格

塩田　桃子・・・・・・アラン・シリトーが書いた社会の除け者たち――トラウマ・障がいを抱える 3 人の主人公

鈴木　杏梨・・・・・・「生」と「死」の二重構造――登場人物の価値判断と成長

竹田柚季乃・・・・・・恋愛観と成長から見る『ハウルの動く城――魔法使いハウルと火の悪魔』

冨永　彩花・・・・・・3 つの時空からイギリス政治の流れを見る――カズオ・イシグロの『日の名残り』における政治イデオロギーの対立

山田　里咲・・・・・・『嵐が丘』――家政婦ネリーの展開的役割

渡邉　愛理・・・・・・ラムジー夫人、リリー、ジェイムズ――『灯台へ』における母子関係

❄ 藤崎ゼミ（英米文学・文化）

遠藤　安美・・・・・・Why Japanese People Do Not Acknowledge Euthanasia as a Legal Option

大竹　愛理・・・・・・日本とアメリカの子供向けアニメーション作品から見るジェンダーステレオタイプとその背景 ―その是正に向けた取り組み

千葉　瑞稀・・・・・・The Importance of Media Literacy in Japan's Consideration of Same-Sex Marriage Legalization

前田　詩衣・・・・・・日本のジェンダー・ステレオタイプによって生じる差別問題 ―性差別とジェンダーへの偏見を減らすために

村上　　渚・・・・・・Ethnocentrism in Japan and Singapore: The Significance of Critical Thinking and Media Literacy

吉木　栞音・・・・・・The Role of Critical Thinking and Creative Thinking in the

Management of the Professional Baseball Industry

渡邉　奈夢 ・・・・・・The Role and Reality of Journalism in Japan

❀ 山口ゼミ（英米文学・文化）

相澤　りこ ・・・・・・差別への適合と反発

大沼ももか ・・・・・・The Bluest Eye: Lost of Black People Solidarity

佐藤　菜々 ・・・・・・新たな「わたし」の誕生物語 —Sula における白人でも男性でもない自由権力を許されなかった女性らが想像する「わたし」という独立した個人—

佐藤　未来 ・・・・・・「見えない領域」に挑む女性の、一人の人間としての自我の解放と限界

佐藤優希美 ・・・・・・実世間の投影 —『ねじの回転』から考える自己認識と社会的な期待の対立—

高橋麻里奈 ・・・・・・『無垢の時代』にみる貴族社会の生き方

高橋由衣菜 ・・・・・・Pecola's Line of Sight —The World She Wants—

千葉比奈子 ・・・・・・ キャッチャーの探求 —*The Catcher in the Rye* における青年期の反抗と葛藤—

沼澤　来実 ・・・・・・ピコーラの人生と結末

根深　　望 ・・・・・・Kate Chopin の *The Awakening* におけるエドナの変貌

股野愛実果 ・・・・・・『めざめ』におけるエドナの変化と彼女の死 —彼女が求めたものは何か—

三浦　早貴 ・・・・・・The Oppressed Women —Two Women in *The Age of Innocence* and Edith Wharton—

山内　美歩 ・・・・・・文学への自己投影 —『スローターハウス5』におけるカート・ヴォネガットの存在—

高橋　百萌 ・・・・・・都市化にみる孤独の物語 —エドガー・アラン・ポーの短編作品にみる「閉鎖的空間」—

英文学会活動報告

4 月 11 日　「はじめての TOEIC」（1 年生対象）
佐藤明宏氏

6 月 12 日　英文学科主催　留学説明会

6 月 27 日　英文学科主催　「月輪まり子　アイリッシュハープ演奏会」

6 月 28 日　声と話し方講座 1 年生コース
「伝える・伝わる声と話し方基礎講座」基礎編
赤間裕子氏

7 月 27 日　英文学科キャリア講演会　「ホテル業界で働く」
安喰あゆみ氏

9 月 26 日　オンライン「はじめての TOEFL ITP テスト説明会」
小菅洋史氏

9 月 28 日　英文学科キャリア講演会　「アイリスオーヤマで働く」
佐藤有咲氏

10 月 31 日・11 月 1 日
Student Teachers 主催「Halloween Game Event」

11 月 21 日　声と話し方講座　1 年生コース
「伝える・伝わる声と話し方基礎講座」展開編
赤間裕子氏

11 月 30 日　科研費・英文学科共催公開講演「ことばの気づき」
大津由紀雄氏

12 月 1 日～ 27 日
Student Teachers 主催「ESL クリスマススタンプラリー」

12 月 21 日　英文学科キャリア講演会　「高校教諭として働く」
渡部明日香氏

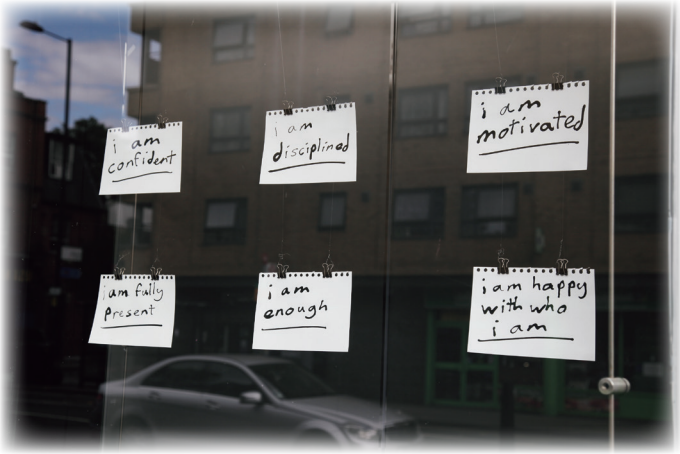
1 月 26 日　英文学科 4 年生対象「フルコースディナーパーティー」

英文学科 4 年生対象 フルコースディナーパーティー（2024 年 1 月 26 日）

2024 年度 英文学会賞 最優秀賞を受賞した嶋幸恵さん（左）と清水美里さん（右）

熊谷優克先生の最終講義（2024 年 1 月 22 日）

English Certification
―私の勉強法―



勉強を日課にする

3 年　渡邉　史歩
TOEIC スコア：865

私は、今回カレッジ TOEIC で目標としていた 720 点以上を取ることができました。昨年 11 月に受験した時は 715 点と 5 点足らずで、とても悔しい思いをしました。そのため、今回のカレッジ TOEIC にはいつもよりも気合いが入っていました。今回の試験では 865 点と、前回よりも 100 点以上点数が伸びましたが、この点数を取るために行ったのが「勉強を継続させる」ということです。私は興味のないことはとことんやる気が起きない性格のため、行動の目的を作ること・自分の苦にならないこと・好きなことを大切にしました。

まず、電車に乗るときはただ SNS を見続けるのではなく、TOEIC の単語が学べるアプリを活用し、単語の勉強を行いました。私は電車に乗っている時間が暇で仕方なく、ただ SNS を見ているだけでは何も自分のためにならない気がしていたため、その無駄な時間を勉強に有効活用しようと目的を作り、TOEIC の単語練習の時間に充てるようにしました。勉強してみると、自分の苦手な単語が多くあることに気づき、アプリにもはまるようになりました。勉強することが全く苦ではなくなり、時間つぶしにもなり、勉強もでき、良いことしかないことに気が付きました。

もう一つしていたことは、e ラーニングの活用です。これは教材がなくてもスマホ、パソコンから勉強できるツールです。これはカレッジ TOEIC と似たような形式で勉強できたため、とても有効的な勉強方法でした。春休みということもあり、普段よりも時間が取れるため、私は e ラーニングを毎日の日課に取り入れることにしました。普段から早寝早起きの生活をしているため、勉強の時間を取り入れることで毎日の充実感が増え

ました。毎日決まった時間に起床し、準備を終わらせてTOEICの勉強をし、バイトに行くというルーティンが私の中にできました。遊びに出かける日も集合前に、少しでもいいから勉強をしていました。

こう言うと、とても過酷であるかのように聞こえますが、毎日少しずつ、やりたくないと思う日は休養日を設け、自分の気持ちを優先して取り組んだため、全く苦にならず、むしろ勉強しないと違和感を覚えてしまうほど、いつの間にか勉強を日課にすることに成功していました。勉強も、日課にしてしまえばこっちのものということです。これが私の勉強方法です。

無理せず学習

4年　池田　樹音
TOEICスコア：830

3年生のときと比べ、今年はスコアを65点伸ばすことができました。去年は45点伸ばし、スコアは765点でした。ある程度英語力が身につくと大幅にスコアを伸ばすことが難しいため、どのように学習していくのが良いか悩みました。今年のカレッジTOEICに向けて、前回受験したときに発見した自分に足りないところを意識して学習をしました。リスニングパートの途中で集中力が落ちてしまうこと、リーディングパートでは制限時間ギリギリで最後の問題を解き終わること、以上の2つが良くなるように学習しました。

リスニングパートでは、疑問詞を聞き逃さないようにすることが大切です。私はリスニングが始まり、序盤の問題でははっきりと聞き取ることができますが、後半に進むにつれて集中力が途切れてしまい疑問詞を確実に聞き取れず、聞こえた文章や内容から推測で解答しがちでした。そこで、何か動画を観るときに音声を英語に変えて観るようにしました。好きな

ディズニー映画を英語で観ることで、長時間のリスニングにも慣れるようになりました。今年のリスニングのスコアは去年と同じではありましたが、去年よりも集中力が続いたことを実感しました。

リーディングパートの制限時間ギリギリで最後の問題を解き終わることに対しては、1 冊の TOEIC 公式問題集を繰り返し解いて自分に最適なペース配分を身につけました。長文読解にどうしても時間がかかってしまうので、得意な短文穴埋め問題を素早く正確に解き進めて時間を節約し、長文読解を落ち着いて解けるように学習しました。また、同じ問題集を何回も解くと正解の解答を覚えてしまいますが、問題の中で使われている単語の意味や文法も覚えることができます。無理に新しい問題集を買わなくても自分が持っている問題集でできるので、ぜひおすすめしたい学習法です。

大学生最後のスコアは 830 点で終わりました。次回また TOEIC を受ける予定はまだありませんが、好きな映画を英語で見たり、今後も楽しみながら英語を学習していきたいです。

わたしの英語学習法

4 年　大竹　愛理

TOEIC スコア：800

私は、英語力を向上させ、TOEIC のスコアを上げるために、さまざまな学習法を組み合わせました。

まず初めに、リスニングとリーディングのスキル向上を重点的に取り組みました。勉強を毎日行うことが苦にならないようにするため、日常的に取り入れやすい方法を学習法として採用しました。例えば、日頃から視聴していた YouTube を活用し、英語の YouTube 動画を視聴したり、英語音声で映画を視聴したりすることで、趣味の一部として、アクセントや英語

のリアルな速度に慣れるよう努めました。同時に、卒業論文作成のために必要な参考文献として英語論文を選ぶことで、リーディングスキルを向上させました。

また、単語力を向上させるために、単語帳やスマートフォンアプリを活用し、映画内で使われていた単語の意味や使い方を確認しました。また、それらのアプリを使用して、覚えた単語のリストの作成も行い、学習が定着するように努め、実際に使われる状況での理解度を高めました。文法力の向上にも力を入れ、文法書や大学の教材を利用して基本的な英語の文法ルールを確認しました。間違いや疑問に思った点はメモし、後で復習することで理解を深めました。

さらに、TOEIC の公式から出ているサンプル問題や問題集を繰り返し解いていくことで、TOEIC の試験形式に慣れ、時間配分のテクニックを身につけました。また、間違えてしまった問題や理解できなかった問題に焦点を当て、それらを重点的に学習することで、効果的な学習になるように努めました。

最後に、私自身が最も効果を感じた学習方は英語を使ったコミュニケーションを意識的に増やしたことです。スマートフォンアプリなどを通して、実際にネイティブスピーカーと会話をすることで、英語のリアルなスピードに慣れることができ、話すという、実践的なスキルを向上させ、自分自身の英語力の自信をつけることにもつながりました。

私はいこれらの方法を組み合わせることで、英語力を向上させ、TOEIC のスコア向上につなげました。

わたしの英語学習法

4 年　吉木　栞音
TOEIC スコア：865

私は学生生活において、英語のリスニングスキルとスピーキングスキルを向上させることを意識してきました。私は教材や単語帳などで英語を学ぶことが苦手です。これまで、学校の授業などで単語テストがありましたが、その際に覚えた単語等はすぐに頭から抜けてしまっていました。それは、そのテストのためだけに勉強し、それ以降は使用していないからだったと思います。英語は日常的に使用することが、英語を身につけるための一つのカギだと私は考えます。そのため、私は日常生活において英語を使う機会を増やすことを意識し、実践的な方法で英語を身につけてきました。

主な学習法の一つ目として、私はインターネットを活用しました。その中でも特に、YouTube と Netflix は英語の学習に必要不可欠だったと感じます。準備中や食事中などは YouTube でネイティブの方の動画をかけながら行っていました。最初は耳が慣れませんが、繰り返し試聴して英語を聞くことで、知っているフレーズや、単語の使い方の知識を身につけることができました。また、Netflix でも同様、海外ドラマなどを視聴すると、教科書ではなかなか学べない生きた英語を身につけることができます。YouTube と Netflix は、どちらも最初は英語字幕で視聴していました。理解できなかった部分は後で調べてみると、よりその英語について理解を深めることができます。

次に、オンライン上で海外の方と交流することです。現代は世界中の人々と繋がることができるツールが沢山あります。私はそれを活用し、海外の方と英語で会話を沢山してきました。英語は世界の公用語と言われているだけあり、様々な国の方々と交流できたことも刺激になりました。わから

ないことをネイティブに気軽に質問できるのも、この学習の良いポイントの一つです。

最後に、アルバイトで英語を実際に使用して接客したことも、英語スキルを向上することができた要因の一つです。最初はうまく話せず、簡単な単語を並べて話していたのがスタートでした。それから何度か英語で接客する機会が増え、失敗を恐れずに自分のわかる範囲の英語で接客すると、次第に英語を話すこと、聞くことに自信がつきました。

今後は、TOEIC 等でもハイスコアを取れるように、文法などにも気遣いながら、楽しく英語を学び続けていきたいと思います。

English Certification A・B・C

「English Certification　A・B・C」は TOEIC 等のスコアや英語関係の検定試験合格等により単位を認定する制度です。下記の英語検定が単位認定の対象となります。

	TOEIC	**英検**	**TOEFL paper**	**TOEFL iBT**	**IELTS**
English Certification A	600 以上 720 未満	2A 級	500 以上 550 未満	65 以上 79 未満	5.5 以上 6.5 未満
English Certification B	720 以上 830 未満	準 1 級	550 以上 600 未満	79 以上 96 未満	6.5 以上 7.5 未満
English Certification C	830 以上	1 級	600 以上	96 以上	7.5 以上

2023 年度 English Certification A で単位申請者：7 名

2023 年度 English Certification B で単位申請者：4 名

2023 年度 English Certification C で単位申請者：3 名

編集後記

2023 年度は2名の新しい先生方をお迎えし、本誌にもご執筆いただきました。フェラン先生は国際交流等に、山口先生は本誌の編集等、着任早々多方面でご活躍されています。また、長きにわたって学会誌の発行を滞りなく進めてくださった木川編集委員は、本号の発行をもって交代となります。英文学会の活性化のためにご尽力賜りましたこと、この場をかりて御礼申し上げます。

振り返れば 4 年前、パンデミックとともに大学生活が始まった学生たちも、この 3 月で卒業を迎えます。期せずして、英文学会誌 49 号（2021 年 3 月発行）からは、どのような状況においても努力し続けた学生をはじめとする学会員諸氏の成果の記録ともなりました。昨年度後期の協定校留学に続いて、本年度前期には英文学科の海外研修も再開でき、その記録も本誌に刻むことができました。学会員諸氏の前向きな姿勢に敬意を込めて本誌 52 号をお届けします。

編集委員　吉村典子

執　筆　者　紹　介

吉　村　典　子　　宮城学院女子大学教授
山　口　晋　平　　宮城学院女子大学助教

編集委員
吉　村　典　子
山　口　晋　平
木　川　奈　緒

英　文　学　会　誌　　第52号

発　行　　2024　年　3　月　10　日
編　集　　代　表　吉　村　典　子
発行所　　宮　城　学　院　女　子　大　学
　　学　芸　学　部　英　文　学　会
　　仙台市青葉区桜ヶ丘9丁目1番1号
　　電話　（022）279−1331㈹
印刷所　　宮　城　学　院　生　活　協　同　組　合
　　電話　（022）278-1613